江戸名所図会

七

839
20
57

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

武蔵國総社六所明神社　府中驛路の左側にあり延喜式内大麻止乃豆乃天神社是なり後世に至るまで同く式内小野神社を合せ祭る故に今両社一社の称あり神主は猿渡氏其餘社司社僧等奉祀す

本社祭神　大巳貴命　相殿　素盞嗚尊　伊弉冊尊

瓊々杵尊　大宮女大神　布留大神　以上六神これを俗に六所明神と称せり

天下春命　瀬織津比咩命　稲倉魂大神　以上三神これを客来三所の御神と称せり

ゟ九神合せて共六所宮と称す此三神のゟ八一宮と小野神社との条下に詳なり

延喜式神名記曰　武蔵國多磨郡八座

大麻止乃豆乃天神社云云　多磨郡

武蔵國風土記曰　大麻止乃智天神　圭田六十七束六毛田

所祭大巳貴命也　閉天皇乙卯始奠宮社花時以

新稲之時以新稲祭之云云　安治兼六年八月十一日己酉及晩御臺所有

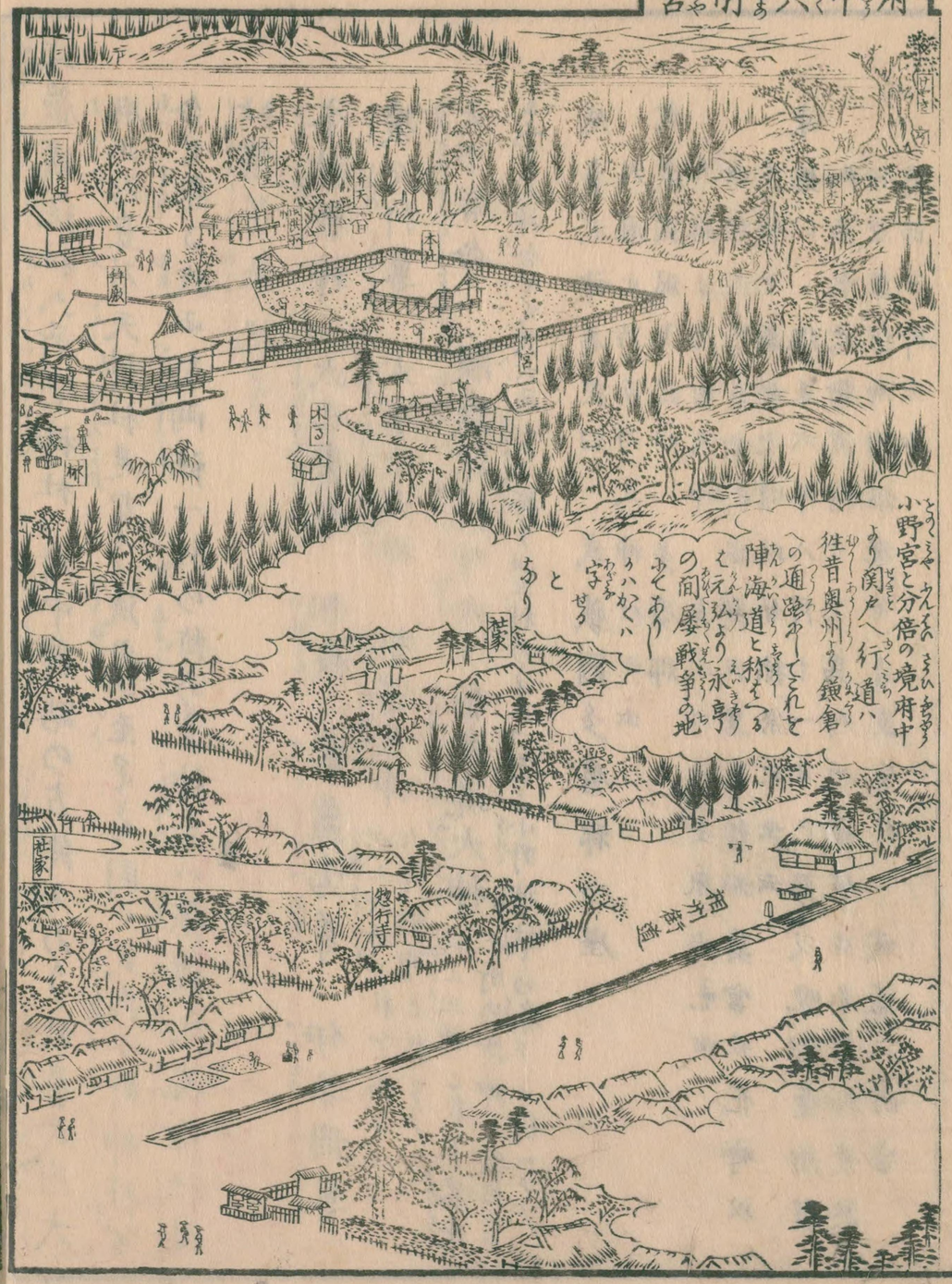
鑑曰　花祭　御産氣武衛渡御中畧為郷祈禱被立奉幣御使於

伊豆箕根両所　武蔵六所宮

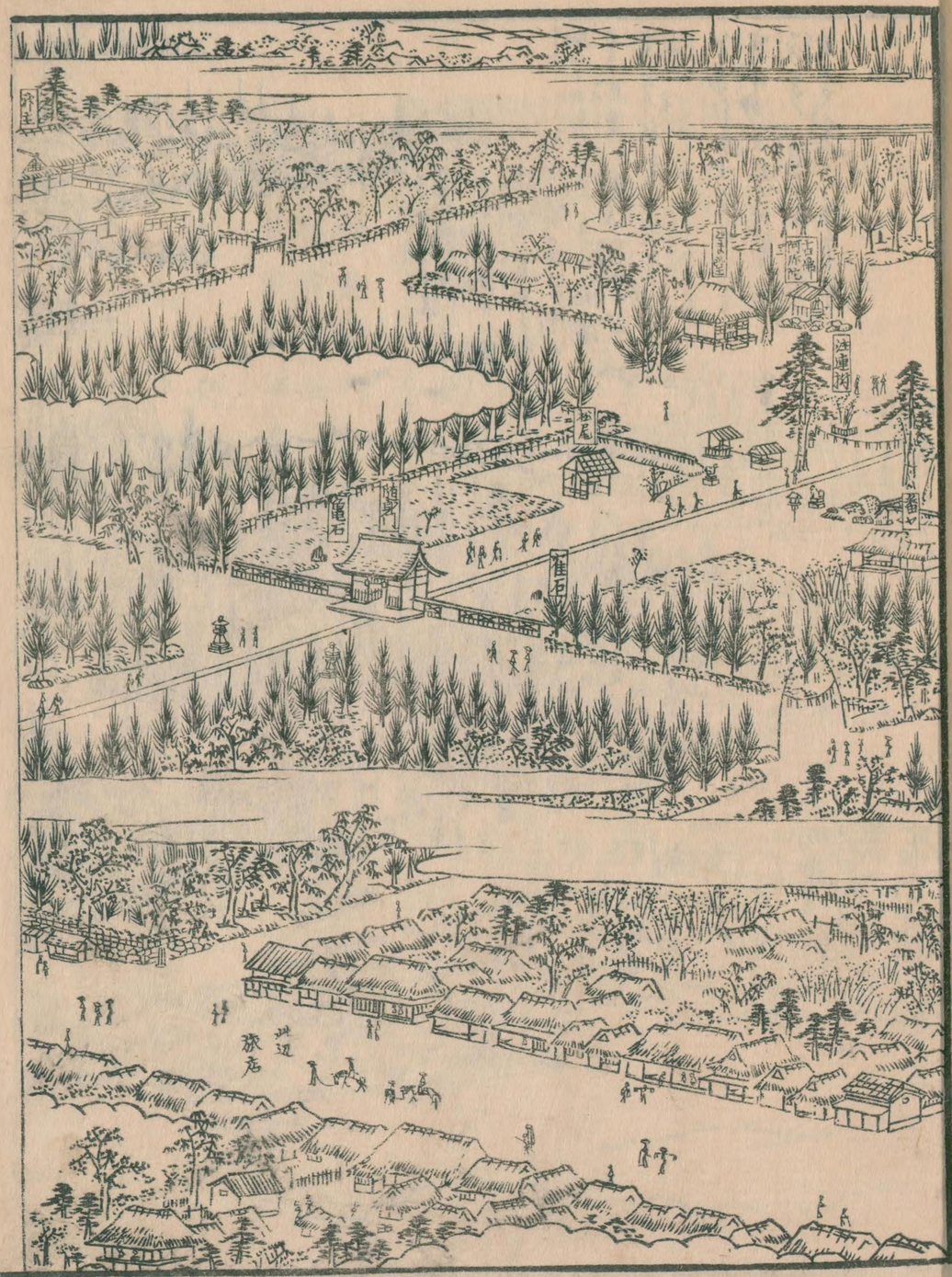
葛西三郎云云　現并近國宮社

曽山文庫
根岸信輔

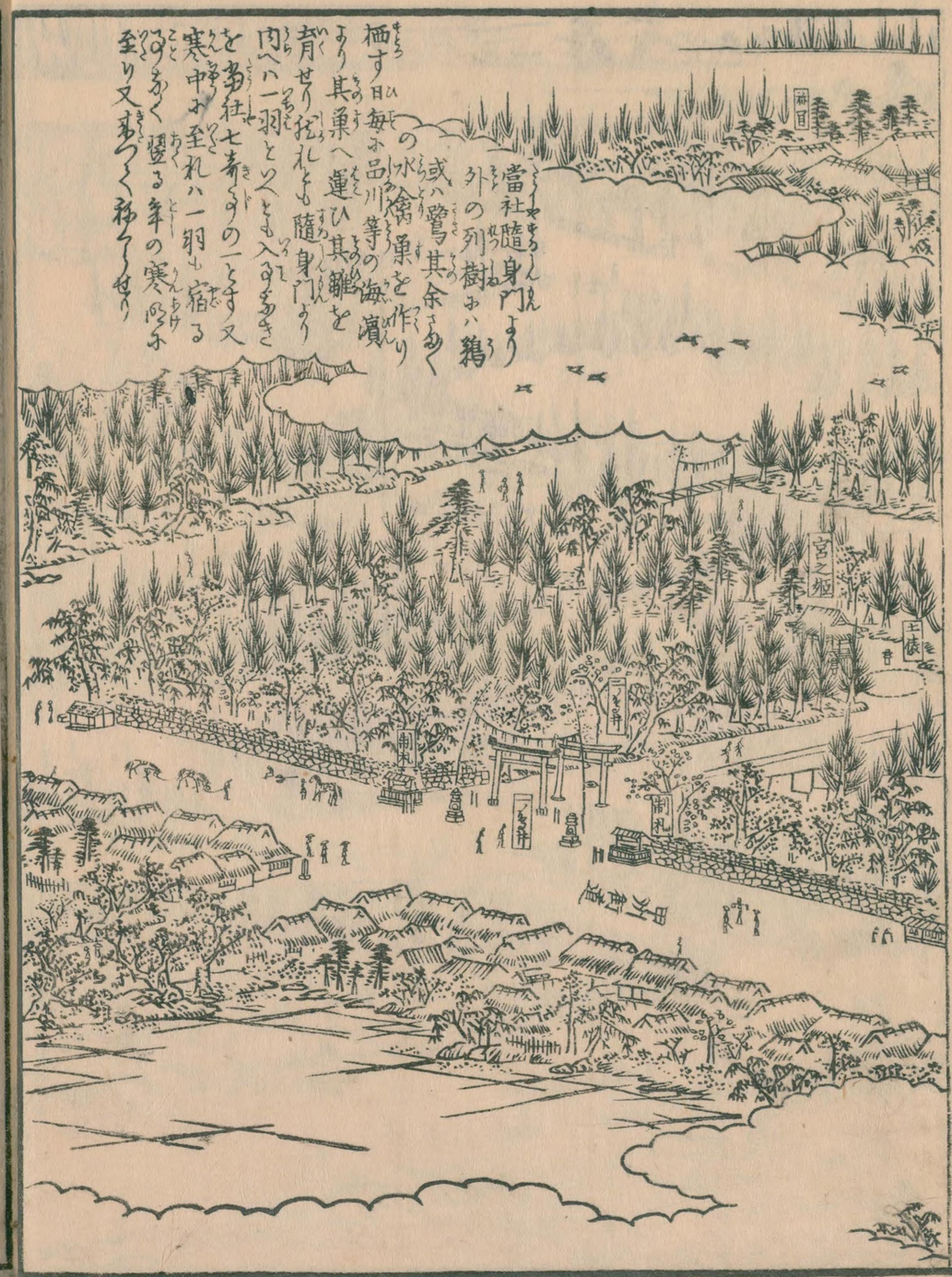
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



小野宮と分倍の境府中より関戸へ行道ハ往昔奥州より鎌倉への通路ゆてこれを陣海道と称をつる元弘より永享の間屢戦争の地なりあ
クハかくハ字せるとあり



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



當社隨身門より外の列樹ハ鵜或ハ鷺其余多く栖す日毎に品川等の海濱の水禽巣を作り其巣へ運ひ其雛を育せり扨れも隨身門より内へハ一羽とゝも入ることを為社七者の一とす又寒中ハ至れハ一羽も宿ること無く曩る年の寒ハ至り又多く移り来せり

同書曰　寛喜四年二月二十四日武蔵國六所宮拜殿破壊有修造之儀武蔵左衛門尉資頼奉行之云云

本地堂　本社の左よりあり中ハ釋迦来左右ハ正観音と地蔵安置せ大般若経書讀一此堂ハ神輿庫同一並よあり神輿八基を収む雲内二神輿ハ小九基社司神輿

阿弥陀如来銭像　同左ハ並よあり高七尺ばかりの座像なり上ハ假屋あり文字ハ高く彫麗の堂を建り佛像の肩ハ銘文あり文字ハ高く彫

又同一藤原氏と二所まゝ同一文字を鑄上ゆせり里諺ハ云く

庄司重忠愛妾の菩提の為ハ造立せしと云ふ

陀坂と云ふ

重忠の造立ふ

重忠ハ元久二年武蔵國二俣河ハ

建長五年ハ元久二年より四十八年を歴し後の年号

人の所ハ此銅像ハ當國の國分寺ハ安置のよし

此ハ捨置さりしこふ安置せしも文左のゝ

大勧進念阿弥陀佛明蓮大士藤原助近

右志者過去二親并行嚴□新發意乃至

法界衆生平等利益奉鑄一丈二尺佛身

建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日

也

護摩堂　同一並よあり不動尊の像を御供所本社の前右よあり安置せ社僧明王院これをつゝ

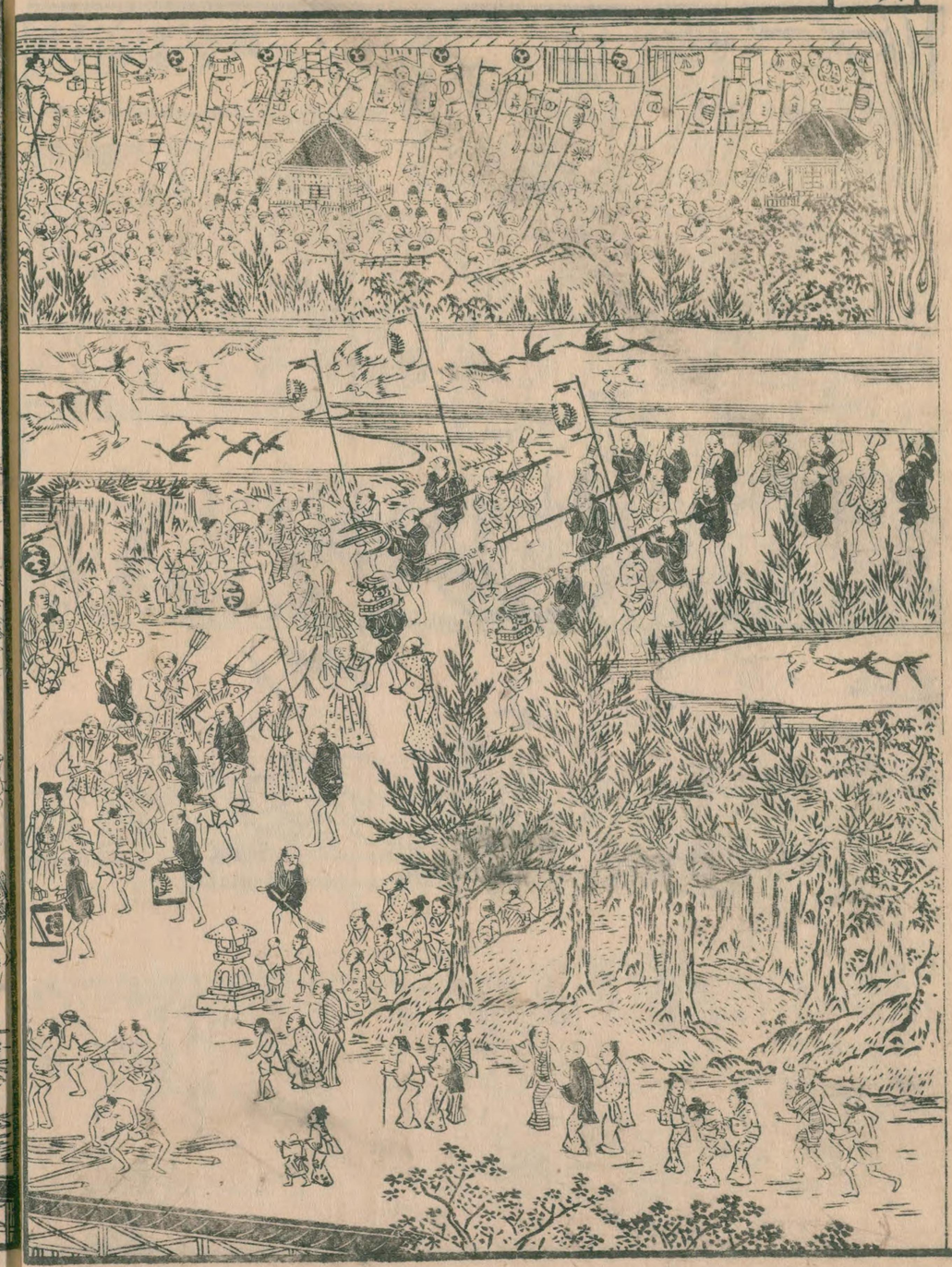
東照大權現宮　本社の右ハ安座せ元和四年戊午序創建とゝ

注連樹　本社の後蒼林の中よあり樟の枯株やゝ数十圍あり相伝ふ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
　　
ガラス使用

一ゆかりあるべき馬のまつまつ
ほ月の月の初ゝ
かの月俗目で懸ゝ
ゝ
ゝ

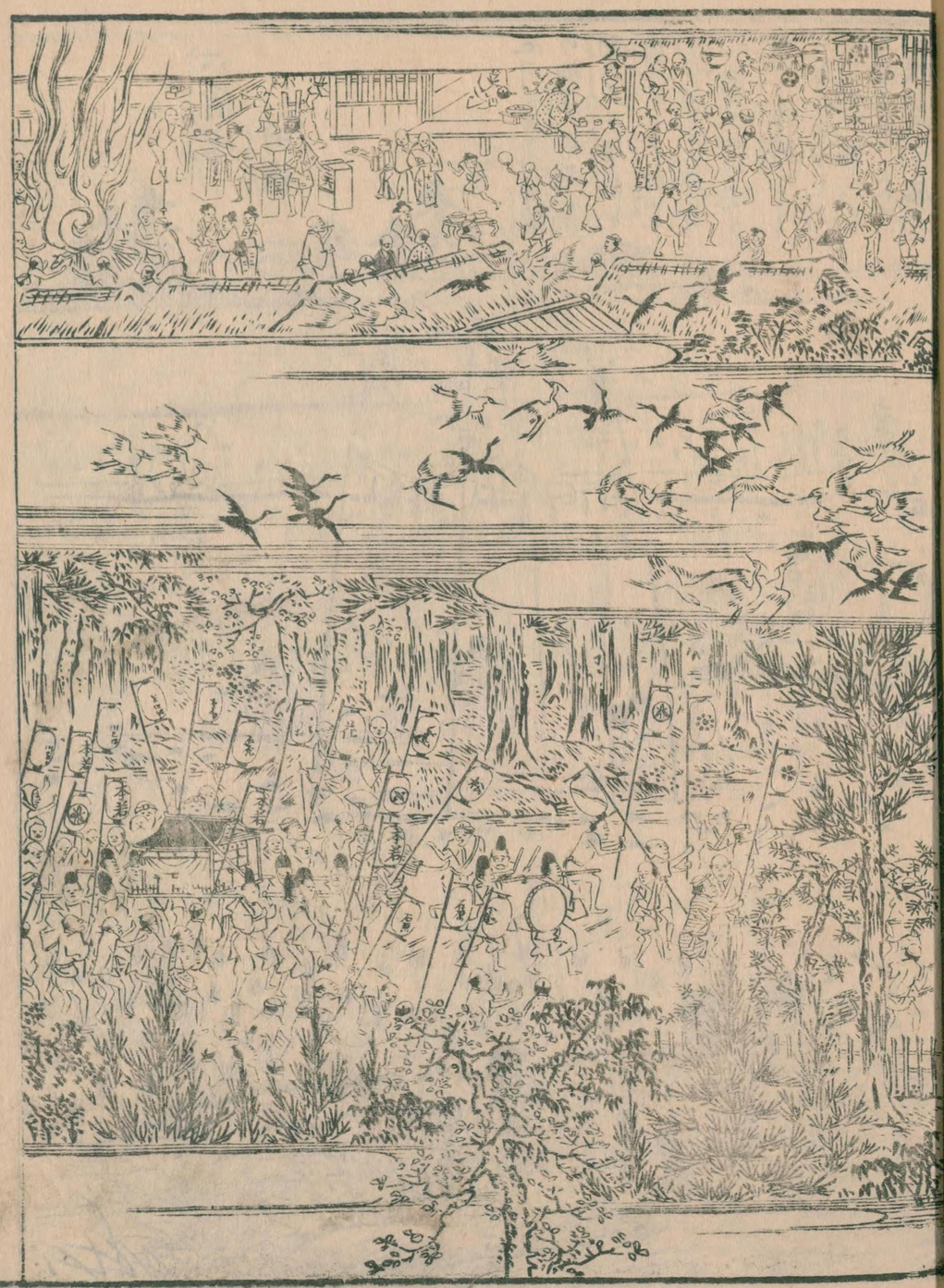
旧例なり　此家ハ大巳貴命出現の時宿を求めしに思ひのすありて一家
藏れたりしかハ辞しやせしの古き例を改すしてかくもるなり　御旅所の
神ハ旧式ことくく終りて　還幸の儀をなせり　神主ハ神馬ハ
乗し御旅所の前ハおいて流鏑馬を射終りて　太鼓を打なりせハ社壇
より市店ハ至るまで一時ハ燈火を點せり　先の間　先の間ハ馬上ハて前驅ハ帰輿ハ及むて二鳥居の左右と本社の前随身門の前西の
馬場ハ場の方へ至るの間等すくく四箇所ハて篝火を焚て白昼の
又神輿供奉の道路を照すの挑灯ハ多くして実ハ壮観なり　御田植神
事　同六日ハ修行を祠後百歩あまりを隔て南の方の稲田ハあるくことを
ハ此日當國の人民當社ハ詣神田の豊熟我上ハあるをもとめ
催し来りて田上ハ集り一朝ハ挿終りて後或ハ躍り或ハ角力を
起又ハ種を異ハすとなくく水旱蝗螟の災ハ穂を同くくして節の進退ハより違あるも歳と
して順あるくくなり　天下泰平神事　六月廿日ハ修ハす　粟鎮を供し　神楽を奏を康平五年
六月廿日　頼義　義家両公奥州発向の時戦勝あり　此日を以て　小祭　七月七日ハ修ハす　俗帷子祭又ハ帷子市ともいふ　称ハ古此日多く
祭ことくく　麻布を製を以て俗産業とも　項此府ハ出し　國守の撰ありて
都ハ貢まり　餘のくくものをハ此地ハ交易せしなり　中ハも七月七日ことくく
せしなり　此名　天下泰平神事　七月十二日十三日両日の間宮之姫社と本社とハ
ありとなり　前の宮之姫の社のお
ハ絆　田面神事　八月朔日終日神楽を奏す　紀伯の筆　年の豊熟を
ハり　此日角力を與ハせり　餘一季の名の祭ハ尤多く
とくくこれを牽ふ遑あくすしくくこれ　大樋をもるすめ
社記曰　景行天皇の四十一年　辛亥五月五日大巳貴命此小野縣に



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

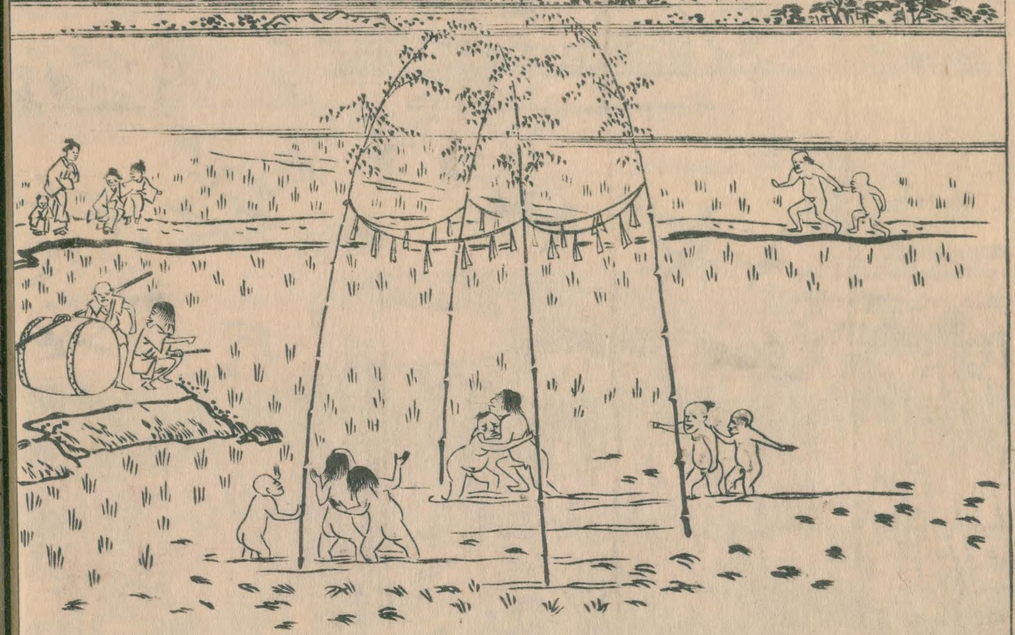
八幡大明神 角人 藤中



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

六所宮 田植

五月六日八幡田植の神事を武蔵國の人民早苗を携へ来りて神田に是を挿やり郷童白鷺の形の造り物わら蓋鉾をとりけてせんまいこしとり傘と唄ひ舞ハ又さをとりのいこれあと唄ひて今植此



田の中に下り立て早苗を挿しなどもまるしく踊舞かに有しかも仮せひもの中に有つるとて一枝のもちふいとめてなる起立く葉末に有むもの

うきりあし

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

出現神託あるあり祠を経営して里人崇敬しまつる（大麻止乃豆乃天神是なり）
延喜式大麻止乃豆〻〻風土記大麻止乃知と豆ハ通音なり又大麻止乃知と豆ハ通音なり又大麻止を以て於保麻止と〻〻或ハ布止麻止多麻止と称へ〻り
成務天皇五年乙亥兄多毛比命を〻く此地ふ國造〻〻〻〻む
天穂日命の孫出雲臣祖名二井因て茲ふ府を開きまつる（武蔵國の國造の權輿ゆゑて府中の祭礼なり）
宇迦諸忍之神狹命十世の孫なり
又大巳貴命ハ此地出現の霊神なれハ是を崇て祖神なるを以
素盞嗚尊を合祭し（兄多毛比命ハ出雲の臣の祖なるを以のあゆゑして當社祭神の内珠ふ素盞嗚尊を崇奉る神秘ありと云）
相殿ふ伊弉冊尊瓊々杵尊大宮女命布留大神等の四神を配
祀し新ふ此地ふ宮祠を経営あり〻く圭田を附して以て國社と
此を称して六所宮大麻止乃知天神と云又天下春命一宮の祭神なり
瀬織津比咩（小野神社の祭神なり）倉稲魂大神（小野神社相殿の神）以上の三
神を六所宮の相殿ふ迂座なして客来三所と称し奉り是を
祭るふ國社の禮を以す爾来大麻止乃知天神小野神社二社合
祀の社となり〻〻〻〻り　安閑天皇乙卯年ふ至りてハ春冬〻

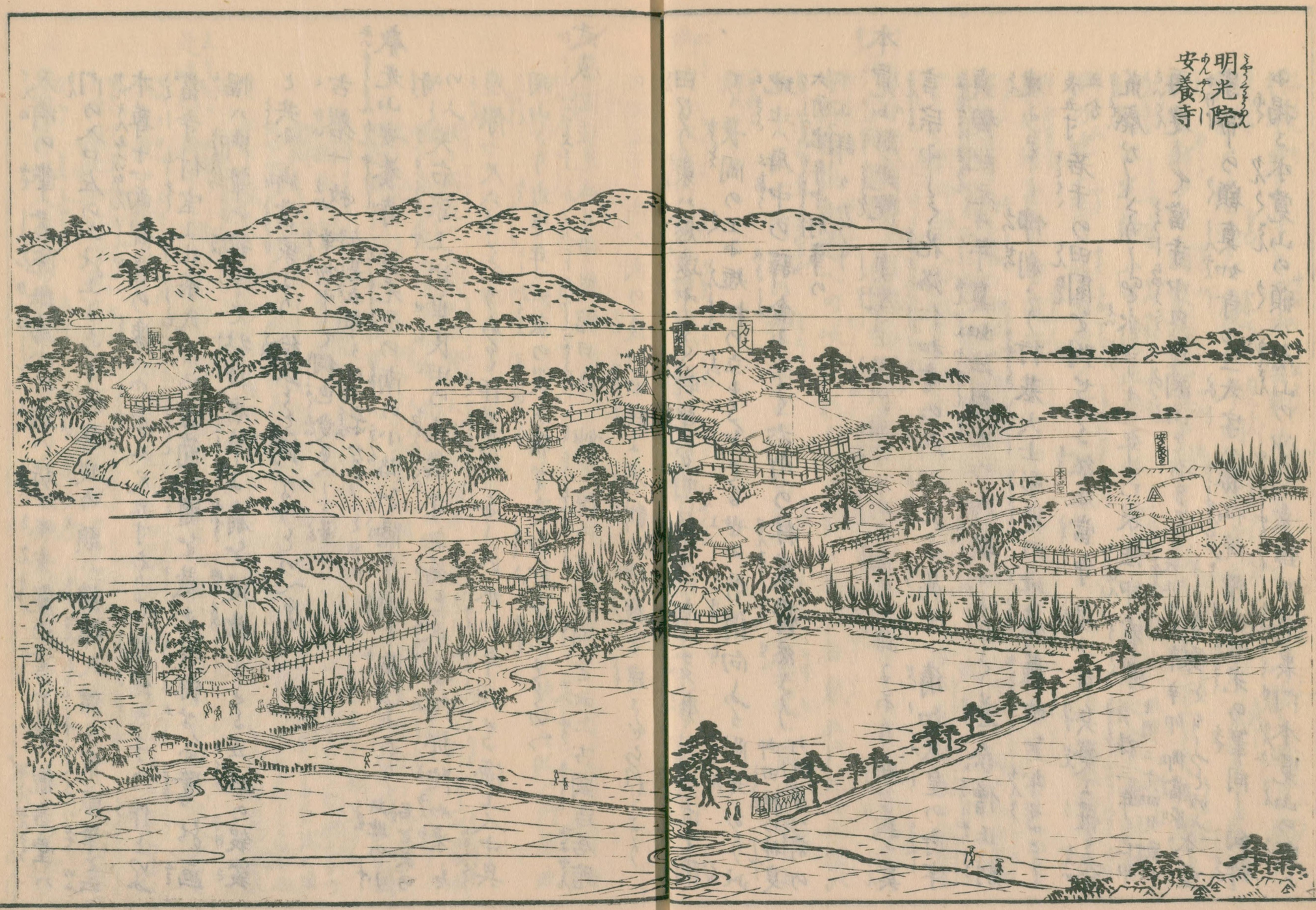
二時の祭祀を行ひ〻〻由旧史ふ〻〻〻り然ふ星霜を歴て康平
五年ふ至り源頼義義家両公奥州安倍貞任宗任一族征伐
發向の時當社ふ詣ゐ軍の勝利を祈願あり〻く夷賊平治
凱歌の時報賽と〻く一華表の内左右両辺ふ槻数株を種し
め以て成功を謝し〻る（其列樹今存せり）治承四年右大将頼朝公當社ふ
詣て請禱し大ふ戦勝の功あり文治年間宮社を再興し又
壽永年間祗嗣を求め頼家公を儀く葛西三郎清重を
して神器を献せ〻む（寛喜四年武蔵左衛門尉資頼を命ぜ
られ當社破壊の修理を加へらる）
所の祭祀今ふ連綿として廢せず後足利家ふ至る迄世〻
将軍家相継て崇敬衰へす就中御入國ふ逮むて御當家あり
る信あ〻ゆゑ社領五百石を附し御祈禱の〻を命せる関原
大坂の両役ゆゑ當社の神主猿渡左衛門佐盛道を〻く御勝
利の御祈禱を修せ〻ゆゑ御感状御直書を給ふ後二代

将軍家よりも又御書判の御宜書を給ふ殊ふ御在國の
總社〻を以て慶長年間石見守大久保氏某をして神
殿を新ゆ〻國家の祀典ゆ列せ〻む且命を下して馬市北
法則を定給ふ後正保三年府中本町より火出て當社神
領の地より至る迄皆悉く焼亡せ依て寛文七年丁未大和守久世
廣之侯を〻て造營使とゆ〻宮社御再建ありし
六所宮御旅所　六所明神より一丁半ちかく西の方府中番場宿の
中程相模街道への岐道札の辻の傍よりり毎歳五月五日大祭ゆ
辰ゆ夜六所宮の神輿をあ〻ふ辻〻まる其式ハ前の条下ふ
詳なり

御田　六所の宮の後の小径をゆく百歩ちかふあり豁然ゆる稲
田なり東ハ悠遠ゆ〻く眺望分明なり南ハ多磨川の流を隔
て〻長岡の上ゆ短松の立ちをゆる世ふ所謂向ふ岡是あり此
地北ハ府中の驛舍ゆ〻く六所の林叢欝然ゆり御田植の神事
六所宮年中行事の下ふ詳ゆなり

本覚山妙光院　真如寺と号し府中本町の南の小路よりあり新義の真
言宗ゆ〻く花洛仁和寺の御門跡ゆ属せ清和天皇の御宇
貞觀紀元の年真如法親王の御願ふよりて慈恭僧正創
建あり〻し佛刹〻り行基大士彫造の地蔵薩埵を安そとし
長五寸五分若干の田園を附せ〻る然ふ當寺度〻の兵燹ゆ罹り大ふ
荒廢なり〻し永享十一年己未法印宥源長禄三年己卯七月二十四日歿せ
再建して當寺中興の開山とす天正十九年辛卯御當家より寺領を
家帯の額真如寺の三大字ハ勝仙院僧正日光の筆同じ向拝
ゆ掲る本覚山の額ハ南山の沙門東鎮の書裏門本覚山の額ハ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

天満の筆書院無為心の額ハ佐々木玄龍の書なり観音堂ハ門の入口左の山北上よりあり大悲殿の額ハ僧禅大僧正覚眼筆と云本尊十一面観音の像ハ丈長二尺五寸ありて聖徳太子の作といふ

當寺什宝ハ北条氏照の書簡二通を蔵し其餘芦ハ鷺ハ画幅ハ御筆の物なりて牡丹唐草ハ扇を縫物にする五條の袈裟と共ハ御當家より給ハりしなりとのへり

古磬一枚 華物なりて銅色愛すべし 左甚五郎ハ作ハ云なり

叡光山安養寺 妙光院の南の小路を隔てゝ同じ並びハあり

崎と天台宗上州世良田の長樂寺ハ属せ本尊阿弥陀如来ハ座像一尺六寸ありて作者詳ならず永仁年間当海上人中興開山なり近き年地魚の災ハ罹て旧記を亡せりとのへり

武蔵國造兄武日命殿館旧跡 妙光院の前北岡を云上古國造居館の地なり

御入國の後此旧跡ハ省耕の御殿を建させられしより大樹屢こゝハ入せられしなり正保三年丙戌十月十二日府中本町より出火して此御殿焼亡せり後ハ御再興もなりて享保年間里民の乞ハ任せ陸田と為して下さるなり故ハ土人ハ御殿地と称せり此所の眺望尤勝れたり

按ハ國造ハ神武天皇都を大倭國橿原に定め天皇の位ハ即時葛城國の造を定め其余功ある者ハ國造を賜ひ又縣主を定めよりこのかた代々任せられ和銅の比を總任の國造百四十四員あり皇朝上世ハ百四十四箇國ゆく國毎ハ國造一人づつありて神祇祭祀を掌り民事を治

嵯峨天皇より以後諸国ハ分割併省ありて六十八国なり岐阿多の二島島要六国なり崇峻帝の御宇ハ河内國司と云あり聖徳太子の仁徳帝の御宇ハ遠江國司又天武紀ハ諸の國司國造郡司并ひ百姓等とあれハ後又國憲法ハ國司國造のみ云天武紀ハ諸の國司國造郡司并ひ百姓等とあれハ後又國司を置れ尤國司ハ國造より位高く權重きなり國司國造と次第して称せられしとなり

これより後世くの國史ハ往く國司國造のみを載られしなれとも其の世ハ國造を罷られしなり

是政村

府中の南多磨川の北の岸頭ハあり此地の里正ハ井田氏の人なり其家系を按ハ祖先ハ畠山庄司重忠の四男井田四郎重政の末葉なり小田原北条家の臣井田摂津守是政ハ子孫なりと云天正十八年小田原没落の頃八王子の城敗れしより後此地ハ住を依て是政村の名あり

悲願山善明寺　圓養院と号し府中本町より閘戸へ行道の右側ふ
あり　相模街道中にして　天台律院ふ　古の泛倉通道へ　常明院ふ属せ本尊ふ阿弥
陀如来の像を安す　坐像一丈六尺あり　胎中ふ慈覚大士彫造の銘創年
久く中古寺院荒廃して記録を失せ然ふ近来編無為解脱居士
（俗称依田伊織貞鎮）　当寺を再興あり　証海上人を中興開山とし　田園
等を寄附せり　故ふ居士の肖像あり　東帯の像なり側ふ　内陣の額ふ
毗尼蔵とあり　准后公遵法親王の筆なり　解脱居士の墓も
堂後ふあり　彼岸山文庫ハ本堂の右ふあり　庫中収蔵せる
書籍ハ解脱居士の義書にして　百二十二箱あり（文庫ふ収むる所の書籍目録一冊あり）
津保宮　同所四丁目あり　西南の方下河原農民の地ふ　ひとし　当社ハ國造
の霊社なりと　今絶ふ茅祠を存せるのみ　されと毎歳五月五日　六所
宮大祭の祭ハ当社より　六所宮へ奉幣使を立る　旧式にして　則六所
宮の神官馬ふ乗して　是を勤む

按ずるに津保ハ壺の濫ゆゑ〜くつわきこの意なり〜ん源氏物語桐壺巻ん
巻のつぼせんさのつぼと記しろきさくらを植ゑ
元年ゆ壺前栽ゑうゑを植ゑ云かゝ〜當社もむかしは國造の庭ゆありし宮居ありしかゆゑ
壺とハ家居の建蔀〜ゆ
河海抄ゆ延喜

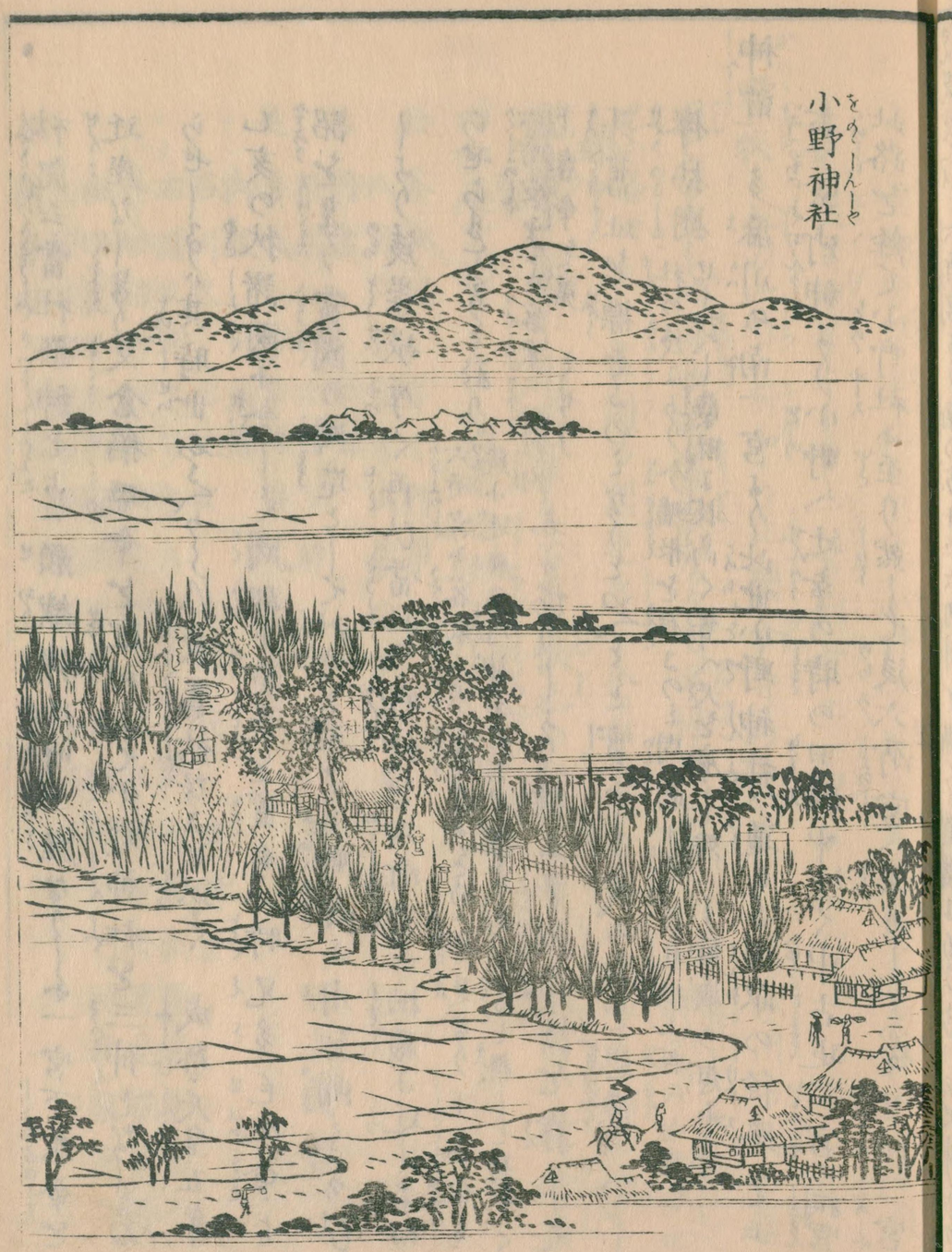
分倍河原　同所の南代小川を隔てる耕田をゆ
紀傳等ゆ分倍ゆ作る分梅ゆ正慶二年の夏新田義貞朝臣鎌倉勢と合
戦あり〜地ゆて時討死せ〜人の墓あり
土人首塚胴塚なと称へく
今猶此あの所間ゆ存す
享徳四年の春も遠倉成氏上杉房顕なるゆ持朝と此地ゆて
争戦〜大ゆ上杉勢敗北せ又享禄三年の夏ハ北条氏康向ゆ岡の小澤
の原ゆ色〜上杉朝興ハ多摩川を前ゆあて陣をとる両軍府中の驛
ゆて相戦ふ
以上の合戦ハ大平記逆倉大学
此餘も度く血戦あり地ゆて土人今も
紀氏五代記ゆ詳なり
遇此ゆの田間を穿て兵器を埋めしゆ是を義す
此地小野宮内友重喬と云る人此地
ゆ一つの矢の根を穿て是を義す

大サ圖の如し
桜の花ハ
透しふ
なるもの

三千人塚　六所宮より南の方十五六町計を隔て道端ゆあり三尺ゆ方九
枝石の古碑を建こう刺く大なる枕字一字上ゆ其巾二尺七分寸土より上ゆ二尺八九寸
を埋ゆ限を考へ先の年縣令の下知ゆよりて此石碑を堀
享徳享禄ゆの文字を鐫くゆて合戦ゆ分倍河原ゆて討死せ一人の墓なるゆ
享徳享禄ゆ合戦ゆ分倍河原ゆて討死せ一人の墓なるゆ三十人の亡骨
此地里正の口碑ゆ按に正慶

代小川　府中の南を流る西の方二里あまりを隔て青柳村より多麻
川の水を分く此辺耕田の用水とゆせり或人云古此地を小川郷
と号ゆ今の代小川ハ即往古の小川の変称なるゆ歟と
ゆるゆを考へす
按ゆ慶長年間官府より六所宮へ寄せたる書の中ゆ六所宮川繞ゆあり
注されるハ多麻川の水流枝條より川を埋め墾田とせしより川勢減じ今
あるゆんされと慶長ゆ後堰を築て土人向田と
地野とあり〜地ゆる依再按ゆ今小野宮耕田をして
字〜同一南を中河原と号る抔ゆて川を隔て〜強と
ます

陣街道　小野宮と分倍との間の耕田の地ゆて府中本町より関戸へ
行道の名とゆ昔奥羽等の國くより鎌倉或ハ大磯抔への往還ゆ
道ゆて鎌倉より北國東國へ軍勢を向らる頃の通路なり〜



小野神社

なほかく称せるなり

小野宮村陣街道を隔て分倍より艮ふ當る地をもいふ府中本宿の内僅に家数三十軒ばかりの小野ハ上古郡村定らざる時よりの号ゆゑ間をも小野宮とよべり

小野縣と称せしものなり今ハ府中の舊名となるより和名類聚抄ふ多磨郡小野乎乃とあるこれ

地墾田しハ元亀天正の頃ゆゑ開發の始ハ漸田數五反程あり小野宮の耕田をさして向田といふ田地北田間の塚ハ中古の甲州街道府中より日野へ往還の一里塚ゆゑ五反田と字せりといふ又小野宮の古街道と唱ふ今野の野往

小野神社舊址　小野宮村陣街道の右ふあり今痕ふ叢祠を存するのこ六所宮の条下ふ詳し合せ考へし

武藏國風土記曰　多磨郡　小川郷
小野神社　圭田五十六束三字田
所祭瀬織津比咲也行祭禮有神戸巫戸等云云
延喜式神名帳曰　多磨郡八座
小野神社云云
三代實録　光孝天皇紀
元慶八年七月十五日　癸酉授武藏國從五位上小野神正五位上云云

社記云當社祭神上古ハ瀬織津比咩一座なり小一宮下春命を
迁座なりまた又倉稻魂命を配祀して小野神社を三神となるね
らせしるハ其時世ちくくるに最舊社なるを以て　成務天皇五年
乙亥の秋諸國ハ令しく國郡ハ造長を置る時兄多毛比命も
詔をまり當國の國造として此地ハ至て小野縣ハ府を爾さるひ
しより後崇敬厚く再ひ當社の御神を六所宮の相殿ハ迁しまね
らせらるとまり六所宮ハ客来三所と称せるものハ即是なり下春命も
六所宮ハ客来三所の内　後ハ迁座の御神なれとも知く是を祭しと祭しく
下春命を第一とせり　考のひがしより僅ハ茅祠一宇を存して
其舊址を標せるのみなりと雖も實ハ千載の古を想像つへし
攀枯樹　社の後ハ今蟠根を存るの周圍十尋計其根上百人を座
藥既ハ枝高く聳へ天を摩し殆二千餘歳の想あり
神道　多麻川の南一宮より此地小野神社へ通せる田畝の径路を云
古一宮御神より小野へ迁幸の時の旧路ハ中古迁ハ二宮の祠官
此路を経て小野社ハ至り然して後六所宮へ来りしとまり其頃ハ二宮

より空輿を舁来れるまり小野宮邑の里民舉て多麻川の岸頭
まで送迎せしまり一宮祠官の口碑ハ伝へ
小野牧　今ハ所ハ府中の北國分寺の邊より小川砂川の間の農
田となりし地其牧の舊跡なりと云伝へ　小野ハ府中の惣称にして
名の条下　往古當國の國造年々八月ハ至りハ此地ハ駒を撰て　尤旧名なり猶前の小野宮地
鳳闕ハ齎しくるとなり公事根元ハ八月廿日武蔵國小野御馬
四十疋を引るとなり　六所宮馬市及ひ馬場の条下ハ詳なり合せ考へし
拾芥抄曰　年中行事部
八月二十日牽武藏小野御馬云云
又　同書　石川牧　延喜式　御牧
武蔵國　左馬寮　式曰　小野牧　秩父牧　己上武蔵
右諸牧　石川牧　駒牽　田比牧　立野牧　小川牧　立野牧
等信濃監牧　武甲牧　者毎年九月十日臨牧檢印共署其帳簡繫
齒四歳已上國仕野三別當國仕調良明年八月附牧監等貢
中貢上所堪用者馬下略
上若不書曰
又

凡年貢御馬者中畧武蔵國五十疋諸牧三十疋立
凡諸國所貢繫飼馬牛者二寮均分検領訖移兵部
省其數中畧武蔵國馬十疋下畧
此余北山抄西宮記中右記猶外ゆゑ小野の牧の名往〻多く悉く挙げ
年中行事奇合
むとゝ〻ゆゑをしらけとゝ〻弱の幾う多くゝ少なく是ゆゑ出ん　頓阿

諸

源山称名寺　府中番場宿北の横小路の右側よりあり時宗ゆゑ
相州藤澤の清浄光寺ゆゑ属せ本ゆゑハ恵心僧都彫造の阿弥
陀如来立像三尺八寸あり霊佛を安せ此地ハ往古六孫王経基
居館の舊跡なりと云伝ふ（古ハ六孫王山経基寺と号せしとあり中古ハ正明ゆゑ作る今称名ゆゑ改む）其後
一光道和上人當寺を草創せ（應永元年三月七日寂）後復遊行上人當寺を
再興あり〻とあり當寺ゆゑ古き大鼓の胴を収む古物にして
内ゆゑ年号等を記せとゝ〻とも文字讀ゆゑ（按ゆゑ往古の陣太鼓ゆゑん）

龍門山高安護國禪寺　等持院と号六所宮御旅所あり九丁たゝせ
を隔て西の方甲州街道の左側ゆゑあり洞家の禪宗ゆゑ〻多
麻郡二股の海禪寺ゆゑ属せ本ゆゑ釋迦如来（丈一尺五寸斗）脇士文殊普
賢の像賢俊法眼の作なりと云當寺ハ俵藤太秀郷の開基
ゆゑて秀郷の宅地の旧跡なりとゝ〻り後足利将軍尊氏公
中興あり故ゆゑ氏公の法号を採て等持院と称せ則尊氏
将軍の肖像あり（當寺其先ハ市川山見性寺と号せ當寺を秀衡居住の旧跡の祭あり呼と云東西南の三方今も堀残）
開山ハ大徹心悟禪師と号し本堂ゆゑ武野禪林の額あり
筆者詳なゝ
藤原秀郷霊祠　境内坤の方ゆゑあり今稲荷明神ゆゑ勧請せ
辯慶硯水井　（此地ハ秀郷の宅地の旧跡なりとゝ〻り）堂後の行教ゆゑ大般若経を書写せ弁慶此井水を汲んて硯の
水とし然ゆゑ古井をゝ弁慶の画なりとゝ〻り又弁慶机よりゝ経を書写せ経ハ焼失せ
畫きし掛幅あり絹地ゆゑ甚古雅なゝ弁慶扇と号け東の坂を西北の方甲州街道ゆゑ
架せ弁慶橋と呼ふ弁慶ゆゑ
あるゝ而已多くれとも弁慶ハ水戸黄門光國卿の撰ゆゑ

史あるとの際きまひしを名あり〻く実なく澄とそくさ名なけをた
観音堂表門を入て西面にあり本尊観音八木佛立像七尺あり左右
六観音の像ハ何れも四尺五六寸あり作者詳ならす
當寺ハ足利家の再興より永徳元年鎌倉左兵衛督氏満小山
義政退治とし〻て發向あり〻し頃も當寺ハ陣座を備けらる又應永
六年ハ左兵衛督満兼周防の大内助義弘ら京都ハ於て逆心を
起せし時同十一月廿一日京都の合とし〻て當寺ハ動座なしあひ
同三十年癸卯春も又常陸國の住人小栗孫五郎平満重ら謀反ハ
より鎌倉より持氏公結城へ發向同年八月小栗落城の後同十六日
當寺ハ帰座同三十一年十月廿三日當寺炎上あり〻しハ同十一月
十四日持氏公鎌倉へ還御あり〻しまるのち鎌倉大草紙ハ云
たり當寺什宝の中ハ往古まる氏公陣中ハ用ひられしと云古き銅羅一口あり
石上山弥勒寺般若院と号ス高安寺より六町あまり西の方同し
街道の右側ハあり真言宗ハ〻て府中の妙光院ハ属を開創ス

始久しく今ハ荒ハあり〻ハ永正二年乙丑権大僧都法印良尊
中興ス本尊大日如来ハ一尺斗の座像ハ〻し作者未詳當寺ハ
津戸勘解由左衛門尉菅原規継墓あり

墓碑如圖

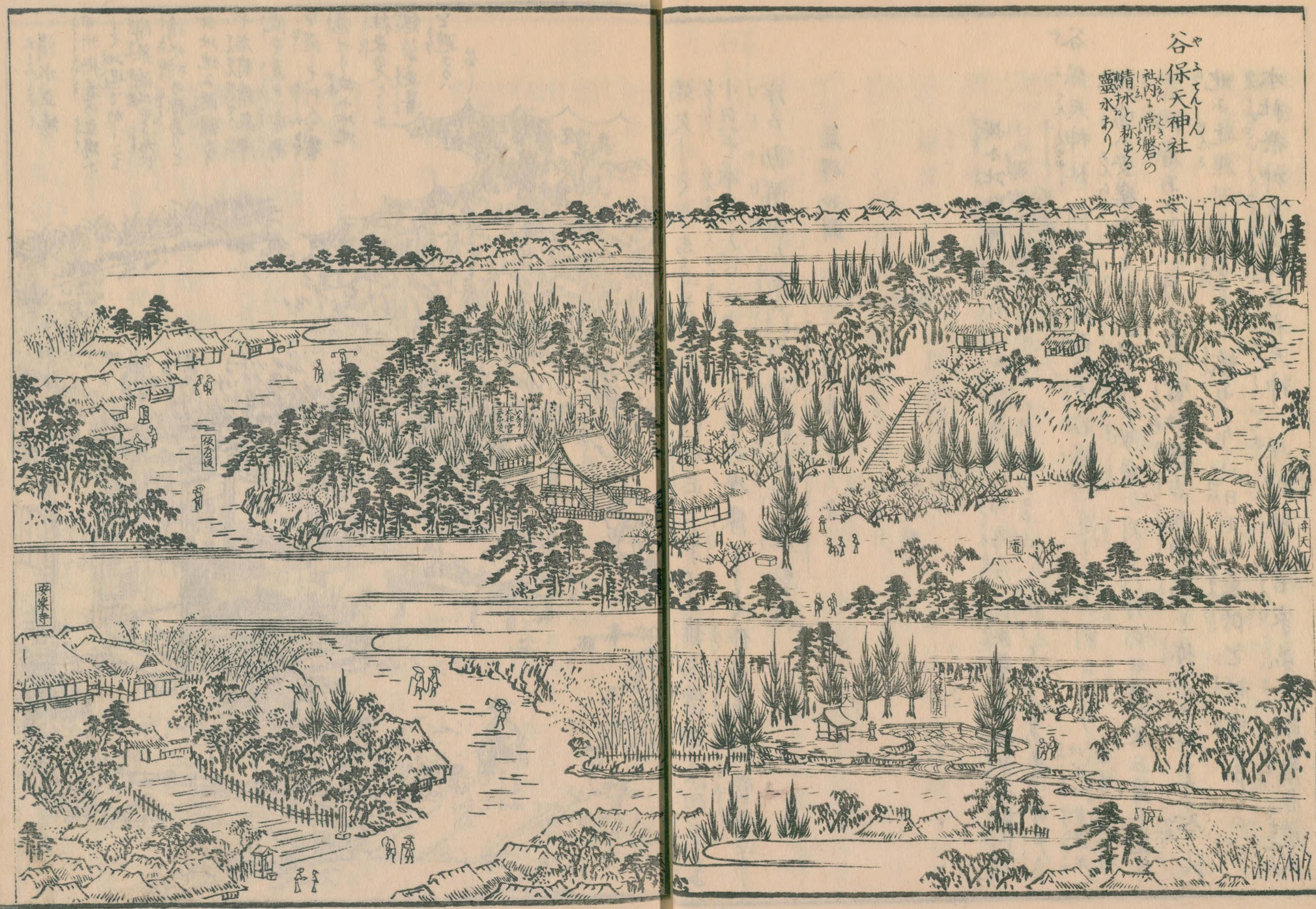
津戸勘解由左衛
子冠死去
延文五年七月十日
沙弥道繼
門尉菅原規繼

按ハ此勘解由左衛門規継ハ津戸三郎為守の氏族なるへし為守の墓ハ八王子の観池山大蔵寺ハあり今ハ幡宿の農民六右衛門と云るものあり津戸氏其遠裔なりとの
谷保天神社同し街道西の方谷保村道より左側ハひり
別當ハ安樂寺と号ス祭礼ハ毎歳二月と八月の廿五日又三月十五日
ハ開扉あり十一月三日ハ當社往古天神島と称ふる地より今ハ
地ハ遷座なし〻縁あり此日ハ小菜供を献備ふるとの
本社祭神天満大自在天神一座神躰ハ菅家第三嗣菅原道武

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

谷保天神社

社内に常磐の清水と称する霊水あり



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

清水立場

甲州街道の立場ふして、此辺てかーこる清泉涌出せる故に清水村の称ありと云此地ハ酒舗あり て店前清泉沸流せ夏日ハ索麪を湛へて行人を饗應せり故ふ此地往来の人こゝふ憩ひて炎暑を避さるハなし

朝臣の手刻なり

額 天満宮 後宇多天皇勅世尊寺経朝卿筆

額の裏ふ左のやうさの二十四字を刻せり又外ハ同し額の写し光國卿こゝを納なしとて裏書ふ元禄三年庚午眉毛軒河埜門敬彫とあり

経朝卿の筆せられし額の背面ハ曰

建治元年己亥六月廿六日乙丑書之

正三位藤原朝臣経朝

常盤清水 裏門出口道の端ふ小さき池あり中島ふ弁財天を安置き清泉湧出紫の僧某當社へ詣し一項和哥を詠尤殿しく下流水車を做く日用の助とせり延宝年間築本地堂 本社の右の岡よあり本尊十一面観音の像ハ慈覚大師の作と云 道武朝臣霊社 本社の後ふあり土人三郎と称す

社傳云昌泰四年 菅公筑前の太宰府へ左迁の時卿三男菅原道武朝臣も又此地ふ流さるゝ事三年の星霜を経ひし延喜三年二月二十五日父君菅公筑紫ふ亡ひぬと聞く悲歎の余り配所の徒然ふ父君の御像を手親摸刻しひ旦暮在ろ

如く事へ孝道の誠を尽さるゝひしを後ゝ一社ゝ奉しまつる
と云り昔ハ大社ゝ僧房も多くありしを櫻本坊邑盛坊尊住坊梅本
坊松本坊滝の坊以上六坊中古迹も猶残りしを夫さへ廃れて
今ハ滝の院と号る一宇天暦ゝ至りてハ村上帝狛犬一雙を寄附ゝ
のこ存せり是古の滝の坊今猶存せり甚の古物又大般若経四巻を収む源義経朝臣ゝ
ゆゝに寄しなりと云伊勢三郎亀井六郎及ひ弁慶等の
奉納なりと云四人書写の経巻なりとゝ

菅原道武朝臣舊館地　同所二丁許南ゝあり空堀城門の跡と覚し
き所も見えく四方二町あまりゝ封境なり土人三郎殿屋敷跡と称
す相傳ふ三郎道武此地ゝ住し當地の縣主上平太貞盛の女を娶
一子を得り其子を菅原道英と号夫より六世の孫を津戸三郎
為守と号くると津戸為守の子ハ安乗寺の条下ゝ詳ゝ或云此地ハ貞盛舊館の地なり
とも道武主貞盛の女婿りしゝ為ハ未考

假家坂　同所安樂寺の門前百歩計街道の西の方へ向ひて上る坂を
云建治二年奉幣使此谷保天神の宮へ下向しゝ頃假ゝ旅
館を設けし旧跡なる故ゝ此号ありと云

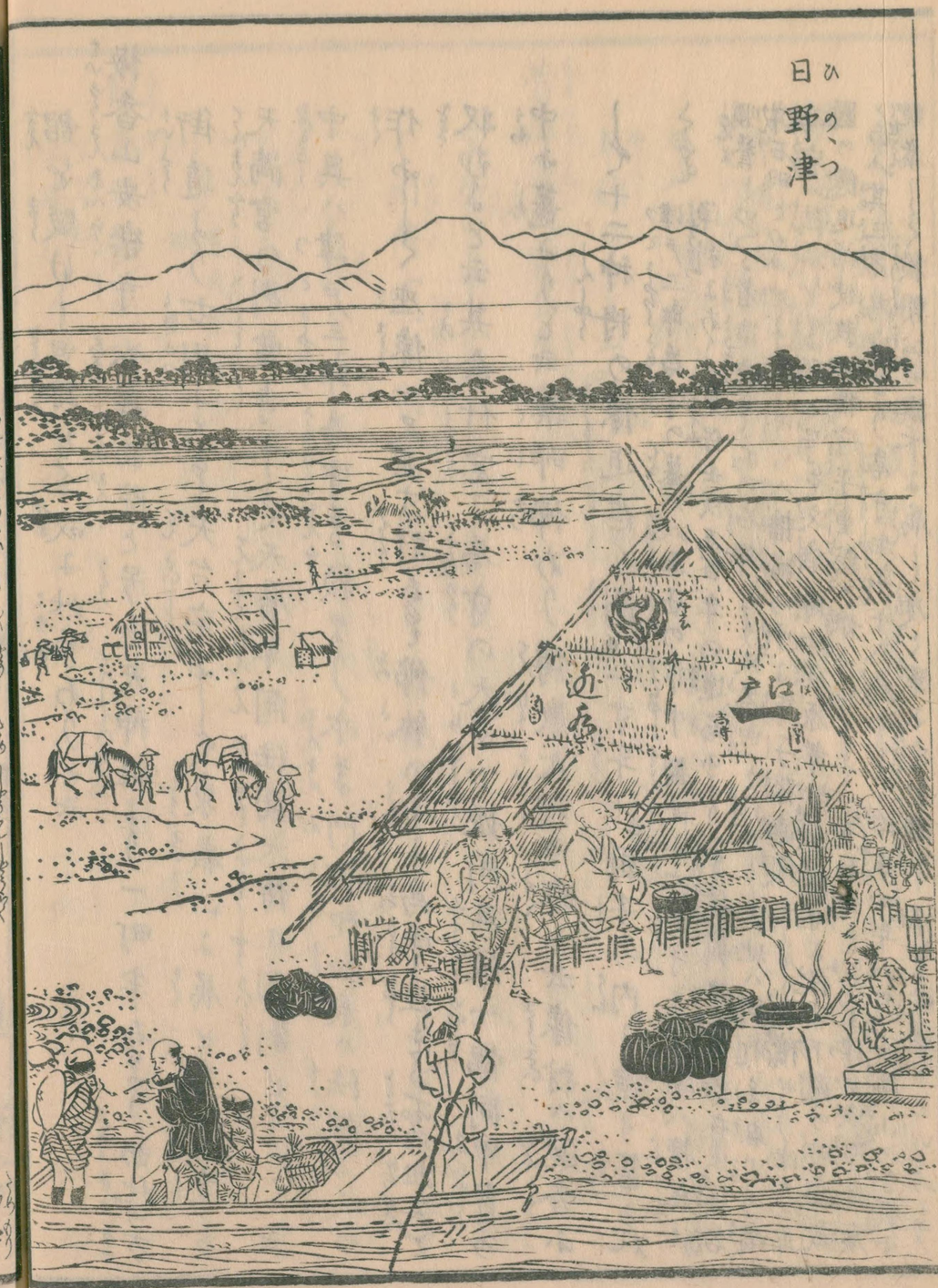
梅香山安樂寺　松壽西院と号也天神社より一町半あまり西北の方
街道より右側ゝあり天台宗ゝ東叡山ゝ属せり當寺を
天満宮の別當寺ゝ天暦年間法圓大僧正開創せりと云
中興ハ津戸三郎為守なり願本ハ阿弥陀如来ハ法然上人の
作ゝ座像一尺五寸計あり佛躰の中ゝ為守注せる歌の血文を
収むると云其余什宝ゝ為守の太刀一振同画像一幅同甲冑の
中ゝ篭りと云薬師佛あり傳教大師の作と云像材ハ沈香ゝ
十二神将の像迫悉く高サ一寸斗北厨子の内ゝ造り篭られ
ゝ　津戸三郎為守の墓ハ八王子の市中観池山大善寺ゝ十八檀林
浄刹ゝあり　寛保壬戌五百年の遠忌ゝ後裔津戸六郎右衛門法名
順誉と云る者造立せ不の石碑なり又為守ゝ相續せり津戸三郎
岩石田と云ふ地ゝ今も八幡宿の中ゝ住し下國の時武蔵
為守ハ法名を親と号也文章博士菅原孝標常陸介ゝ仕し下國の時武蔵
國の徳追補使秩父権守平重綱ゝ娶しゝ一子を生し名を津戸次郎為廣
其三男為守ゝ生年十八歳ゝして治承四年八月石橋山の合戦ゝ
馳参しく頼朝公の旗下ゝ属し度く軍ゝ忠を頭し名をあげしと云

建久六年二月南都東大寺供養の為将軍上洛守
供奉し同三月洛に入同し廿一日法然上人の庵に参り念佛往生の道を兼て
聞ハ念佛の行者となり建保七年竟に出家をとく生先上人より贈
法名をつくる願と号せ仁治三年十月廿八日より三七日の間如法念佛を修も
同十一月十八日結願の夜極土の住居を願ふ自腰かさ
切五臓六腑を取出し傳大口に包忍ひ後の河へ捨させられとも夜陰の
なるとバ人更に知らなし苦痛もなく十九日に至りて猶臨終の心地か
くれバ息男民部太夫守朝に此のを告ケ由上人告ケ覚て後件の
正月十三日の夜夢に来る十五日午刻に迎へ念珠を持て西に向ひ端座合掌
日に至て上人よりの形の袈裟をうけ紫雲空に靉靆し異香室に
高声に念仏し午の正中に息絶ぬ甚奇特なり後水
裟を掛く五十七日無力常の如く往生をとけ
くしとも彼子孫上人の教消息なし念珠袈裟を相傳して披露
唯是る預ろ不思議の奇特を載るのみ（以上尼夫師行状異賛の要を摘採す）

玄武山普済禅寺　日野渡口より此方の岸頭を右へ十丁斗入て芝崎

村と云よあり　此所を立川と云昔の郷の済家の禅林にして相州鎌倉の
建長寺に属せり開山ハ真照大定禅師物外可什和尚と号す　貞治
二年癸卯十二月八日寂す　本尊ハ正観世音座像二尺斗あり左右に
禅師の墳墓及び肖像あり
十六阿羅漢十大弟子等の木像を安置共に作者詳ならず中
奥大檀那ハ立川宮内大輔と称す　法名ハ宝山道貴大禅定門と

日野津



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

芝崎普済寺

境内ハ延文年間ヨリ開ける所の六面乃石塔を存せり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

墨縛ハ當寺はあるとも其墳墓の所在をあらはす

佛殿惣門の内ふあり本尊ハ釋尊中ゝ座像三尺計あり脇士

文殊普賢二尺斗共ふ作者をあらはす

其記ふ平重能平義親平高親等の名を記せりとなり

五十嵐市左衛門感狀曰

景虎淸出陣ゝ砌三田彈正忠政定先陣而大幡く

陣所八王子堺迄北条氏照ゝ及一戰段為ゝ所五十

嵐市左衛門竹田新八郎ト云武士ヲ討ゝ二番着到

賞功不跡時芝崎三十貫文所ヲ被仰下者也

依ゝ如件

永祿三庚申年三月七日

立川宮内重能在判

開山大定禪師真像座下之記曰

彩色啓端造立助緣芳衛辨翁啓範宗來啓一宗華

宗義啓端宗順啓勝宗範啓壽壽性了宗宗快翁

塗師行盛佛師上總法橋朝宗幹緣比丘啓達

應安三年戌十二月三日敬記

當寺境内北の方ハ往古立川宮内大輔某の宅地たりしなり

數年合戰の地ゆゑ今猶林中ふ首塚と称するものあるハ是謂り

と云今も墮の跡と覺しき地存して山中折とし矢の根の類の武器多出

ありといつゝ又慶長の頃立川義賀なる人ありこれふ云宮内大輔

一族なるべし豊太閤の朱章あるを以て當寺天叟宗祐和尚

御開國の砌寺領を定奉り朱璽を賜ふ又宮内大輔為討伐

佛閣を放火なしゝひ靜謐の後ハ修理をくさとある證狀をもつ

て後住持覺栄宗理天叟の事を愁訴ゝ為ふ御加增あるくき

旨被仰下とのゝとも遲く成るゝ為ふ先栄和尚改衣の為上京あし

途中迁化せり後久しく無住の寺となり朱章を欠と云然るふ

寛永の末住持大年といふる僧當寺ゝ住せしゝ故ありて廣福寺

ゝ退去せゝと什宝の古文書古器の類を悉く持ち去れ

と云く今ハ寺の朱章を傳へ存せるのみ

日本年代配合鈔曰 永正元年甲子九月廿五日立河原於山内顕定扇谷上杉朝義合戦朝義軍敗テ太田下野守為ル始多兵死ス

南朝紀傳康正元年己亥四月廿一日鎌倉成氏と房顕ハ定政上杉長尾景中と武州立川原ゆく合戦云々

小田原記云永正元年甲子九月廿七日駿河の今川氏輝并小田原の松田左衛門頼重在加り給ハ此勢を合せ扇谷の五郎頼良大将軍として武州立河原へ陣営を布山内の管領上杉民部大輔可淳入道并ゆ当屋形憲房東八州の軍兵を催し押寄たるゆう夜ゆ入れハ山内の加勢と越後の軍勢ゆ攻られハ朝良あゆ敗ゆかけそらもゆく河越の城ゆ落延梅酸の渇をやをむるゆ

六面塔 塔の中ゆあり 高サ六尺ゆ一片の幅一尺五寸あるゆ一ツのなり 六面の石ハ一片ゆ蓋石と臺石とを穿ちゆく立合せるゆ前面の二枚ゆ金剛密迹の二王を彫刻し後面左右の四枚ハ四天王の像を刻せり上の方ハ何れも宝尽の紋を鏤て其間ゆ常の石工の名ゆ文左の如ゆ刻せり 増長天の一片ゆ戦号を刻ゆ極めゆく奴作なり

延文六季辛丑七月六日 施財性了立 道圓刊

按ゆ前ゆ挙ゆの開山大定禅師肖像座下の記文ゆ性了の名あり六面塔の財主性了ゆ一なゆし 延文六年ハ康安と改元の年ゆ應安三年ゆ至ゆ

ゆ十年なり然れハいゆ此人なゆ

普済寺境内六角古碑 高サ五尺二寸 巾一尺四寸計

那羅延堅固

密迹金剛

増長天王

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

多聞天王

持國天王

廣目天王

當寺境内の地ハ多磨川の流ゝ臨を勝景の地なり富士箱根秩父郡の遠嶂望ゝ遮り尤幽趣あり北の方ハ往古立川宮内大蒲某ゝ城営の旧址ゆゑ其形勢を存し懐田の情を催さしむ又小田原の北条幕下なりし五十嵐小文治といふる人も此地ゝありし由土人云伝へしより前ゝ顕せし永禄三年の感状ゆゑ五十嵐市左衛門といふる名を注しより何ゝも其氏族の徒なるべし此故ゝ今も此地に五十嵐氏の人尤多し

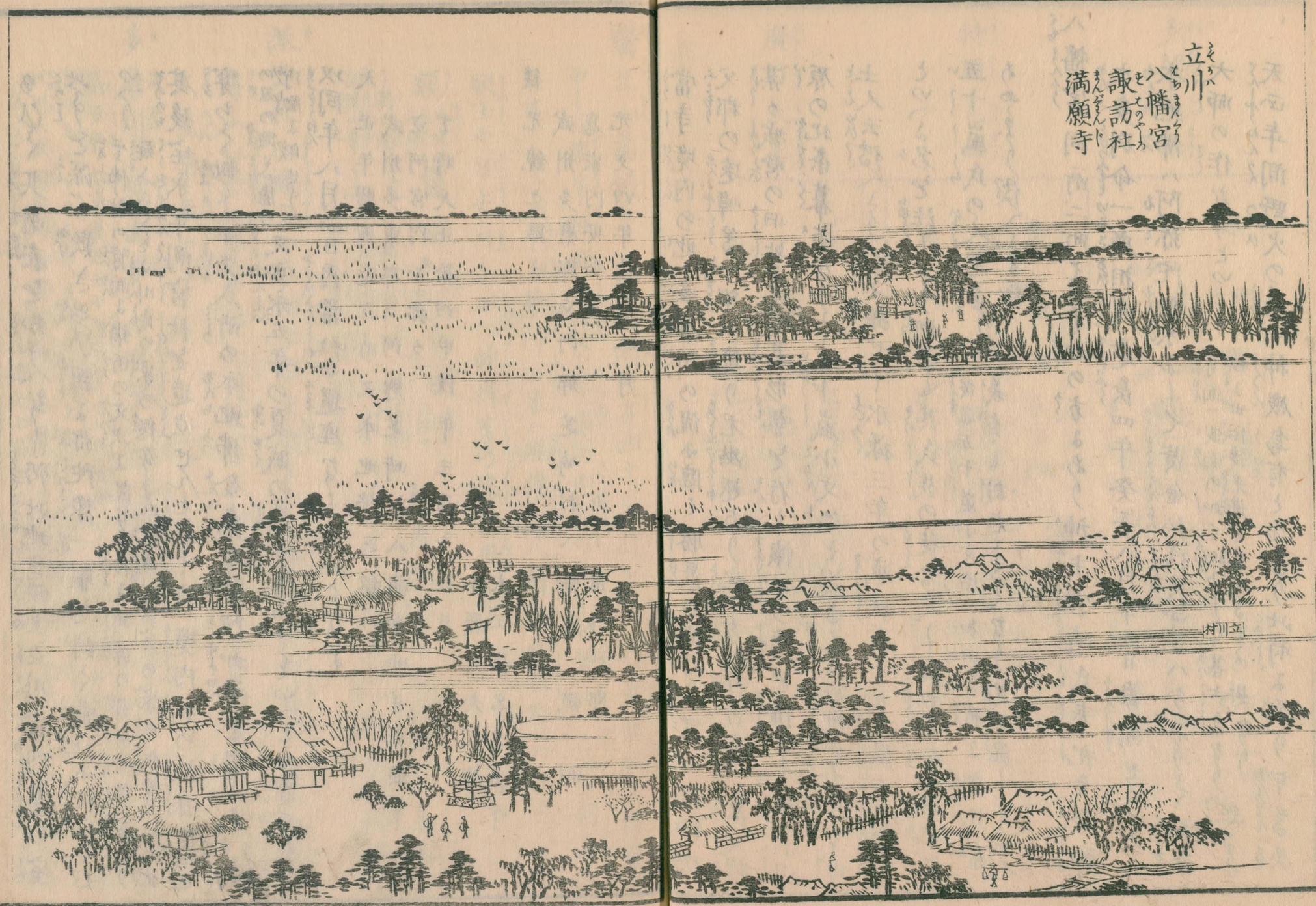
按ゝ五十嵐小文治ハ和田合戦ゝ朝比奈義秀ゝ討れしる人なり題を混しる土人あやまり伝へしる歟

八幡宮　同所二町ばかり北の方ゝあり神主宮崎氏奉祀を祭神本多別命一座相傳建長四年癸子八月十五日勧請せりと云本地佛ハ阿弥陀如来ゆゑ黄金仏法丈四寸八分ありく弘法大師の作なりといふ

背面ハ假面の如く甚古色なり然るゝ按ゝ世俗後光佛と称するもの是なり

天正年間野火のゝゝ神殿焼有とゝ此時ゝ至り年ゝ失

立川
八幡宮
諏訪社
満願寺



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

のひく其所在を知る人なし仍此地の領主立川宮内某の室
此すを深く歎き思ひ新に弥陀像一軀を鋳て當社に収らること
しり佛躰の背面に鐫所の文次に記せり按に新像の膝に梅鉢の紋あり
疑らくは立川氏の家の紋なるべん欤或ハ其室の家の紋なるべん欤
其後宝永年間宮社を造立せんとせし時境内松の枯株の根を
穿ちて鋤下に失ひ所の本地佛金像の弥陀如来を得たりの時鋤
の刃の跡ある像の胸に印せり又安永五年の夏賊の為に奪ハるゝとも霊威あるを
以同年八月四日再當社に還座なしたるとなり

天正年間新造立所之本地佛之銘曰
武州多東郡立河郷芝崎村八幡本地并奥願主
立河宮内お孫ろ
于時天正拾四甲戌年三月十五日
本願大夫式部
大工推名土佐守

後光鏡之銘曰
武州多磨郡立河郷芝崎村八幡宮鏡一面
爲家内安全
元文四年己未八月
五十嵐与八郎

醫王山萬願寺 同所南の方四十歩計を隔て黄檗派の禪嵐
やゝ鋏牛禪師居住の草庵の旧跡なりしを後に一宇の蘭若と
なせしとゝ本尊藥師如来ハ座像三尺計恵心僧都の作ゝ
脇士に日光月光十二神将等の像を安せり

額本堂向拜に掲く南岳悦山筆

醫王山

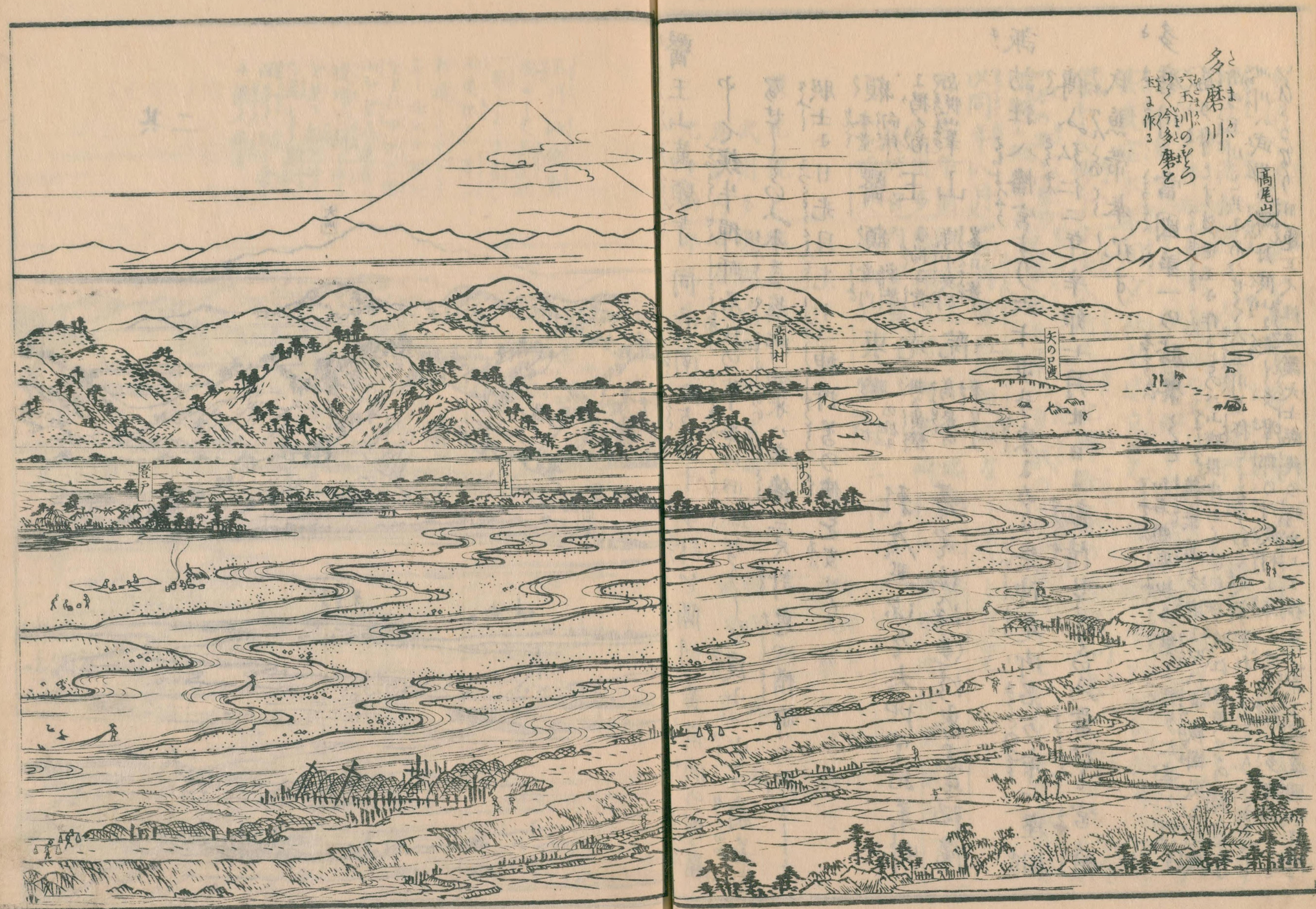
額堂内家帯に掲る當寺中興別峯日一筆

東光院

聯左右の柱に掛る黄檗高泉の筆なり

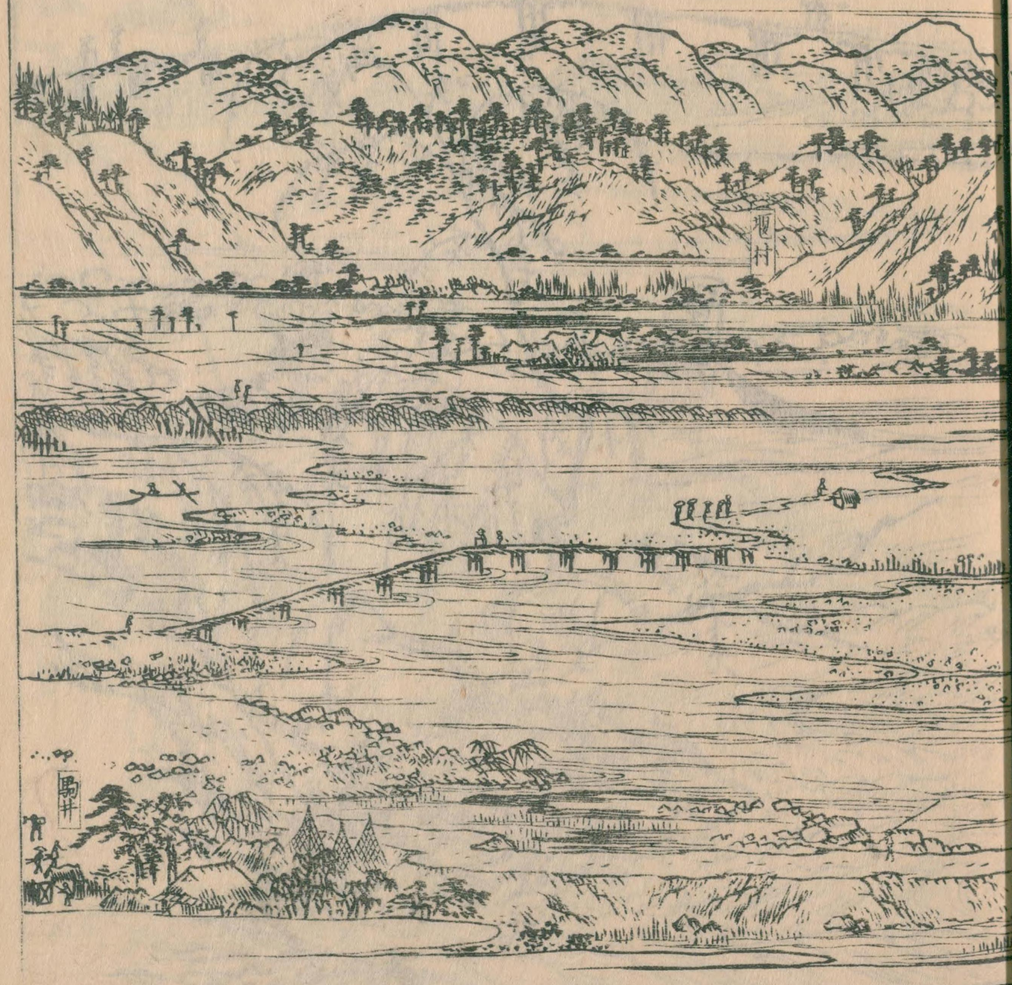
孔雀堂 此堂を大地世紀某州
諏訪社八幡宮より六十歩斗東にあり祭神建御名方命一座相
傳ふ弘仁二年辛卯七月廿一日に勧請せしとゝ當社も宮崎
氏兼帯奉祀す

多磨川 當國第一の勝槩とす
和名類聚抄多磨に作り太宴と訓す
萬葉集多麻に作るとす後世玉に作るとハ山城摂津
武蔵國風土記残
篇多摩郡の丹波村に発し多摩郡の丹波川と称せしより文字を
所の玉川と共にあハせ六玉川と称せ流て多波川と
此川ハ武州の堺丹波
日蓮上人注画讃大士臨終の時池上に移る条に武蔵國田波河



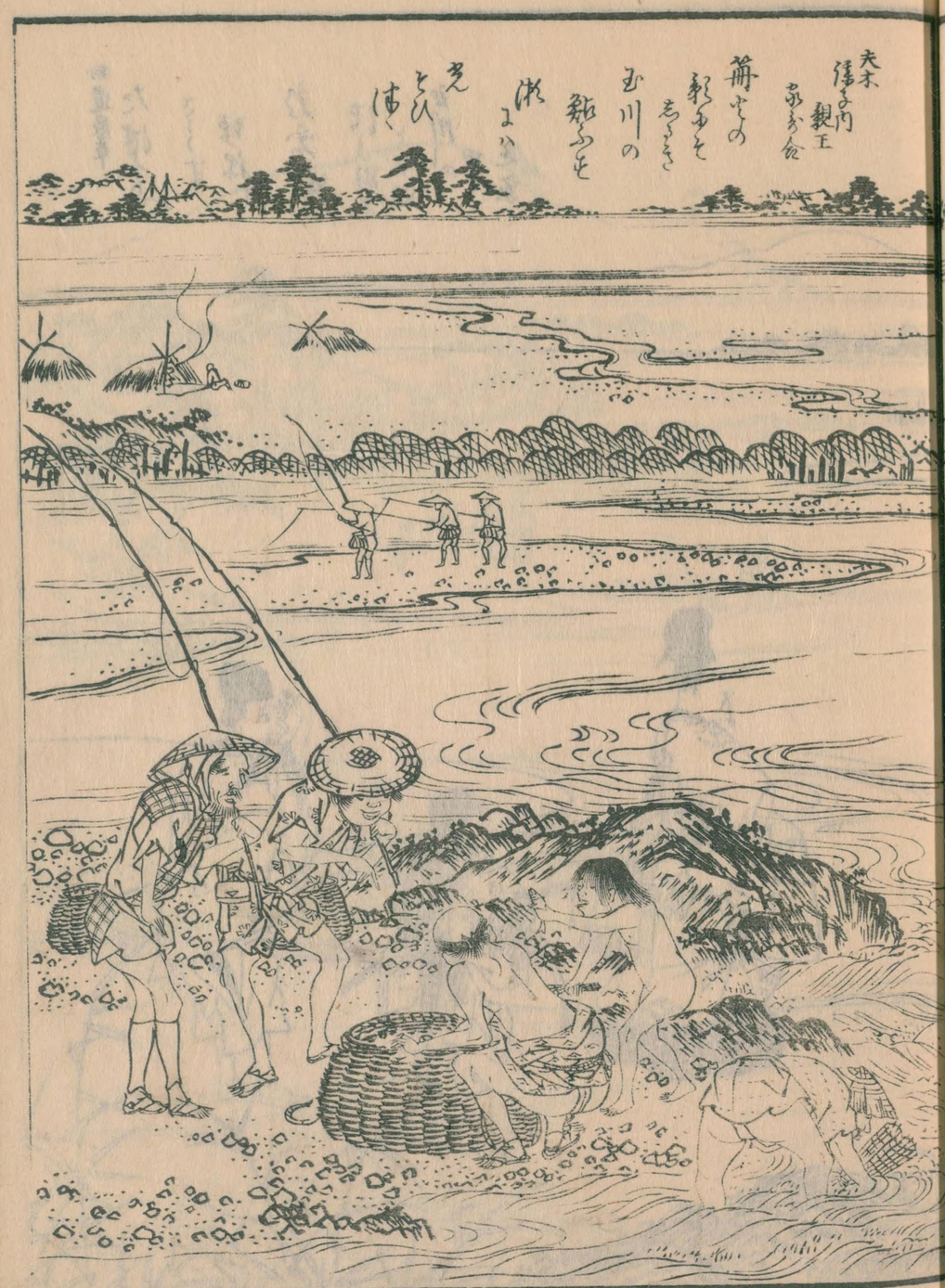
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

玉川ハ砂場廣
豁ゆゑ其流れ
一帯まあるす多く
雨後杯ハ渡口
移轉して定
なし西北ハ秩父
よりの甲州の諸
山を望み東南ハ
堤塘の斜ゆ連る
を見る鮎を此川
の産とす夏秋の
間多しかゝ常
ハ漁人絶セ



其二

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

拾遺愚草
たはこのや
さゝす
地名
多摩川
ちらぬき
とも如
里の
定家

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

の辺やゝく滅を尓せへ〜ゝも〜ゝえ又北條家の分限帳ゝ多波川とあり
水源ハ甲州丹波山より發し　田洋義章の武蔵野地名考ゝ當國多摩郡
入くハ日原川も會流す　多摩郡日原山小菅山等　御嶽山の麓を経く
青梅の南ゝ傍羽村　四谷上水の撫口あり　及ひ福生　拜島等の地ゝ至る又此地
ゆく秋川の流も落會ひ　甲州境の地より発して多磨郡伊奈村五日市
村等の辺ゝ傍て流れ　ゝとの秋川なり
又石田と云ゝ至る浅井川も合し　八王子の峰頂より出る　和泉村中島村等の
地より来ハ多麻荏原橘樹三郡の間を東流し海ゝ會せり　橘樹郡
登戸二子小杉平間河崎等の地ゝ傍ひ荏原郡ハ瀬田等くか下丸子矢口八幡塚
羽田等の地ゝ傍く流れ　甲州國境より當國多摩郡羽村迄十餘里羽村より
六郷迄十六里と云武蔵野地名考ゝ周流九四十里とあるハ水源よりの行程なり

万葉集
多麻河泊尓左良須氐豆久利佐良左良尓奈仁曽
許能児乃己許太可奈之伎
此詠を拾遺集意の巡ゝハよゝ人まゝすとあり又六帖ゝハ昔の今ゝ難
拾遺愚抄
さやゝかなるともあり
湖水やうたゝの影をとゝめぬむ川の里　定家

建保名所百首
玉川のふちゝをあらはるゝ波を形むはるけ
あらはるゝ　家隆

武蔵國風土記曰　多磨郡　多磨河
出諸鮮及鵰鴨鶉等亦里人作調布納内蔵寮云云
東鑑曰　仁治二年辛丑十月二日丙子以武蔵
野可被闢水田之由儀定訖就之可被懸上多磨河
水之間可為犯土之儀云云
掘ゝ武蔵野ゝ水田を闢き又多磨川の水を用水ゝ引　権輿なり
此河ハ武蔵野の勝槩ゆく日野津より以西ハ水石の美奇絶最
多し以東ハ平地なれとも長流の徑ゝ往ゝ観を改め亦勝景ゝ
あるゝ鮎を以く此川の名産とす　故ゝ初夏の頃より晩秋の頃迄
都下の人遠きを厭ゝ来ゝ遊猟せり
高幡山金剛寺　高幢邑ゝあり　東鑑ゝ高幡三郎と云人の名あり此所より生る　新義の真言宗
ゆゝて花洛三宝院御門跡ゝ属せ大宝より前の開創ゝ
其後弘法大師再興すとゝ本尊不動
明王ハ古佛作不詳　座像一丈餘あり　炎光ハ布字十有九を刻し利益
脇士二童子化人の作なりとゝ　無辺自心堅固の相をあらハせり　化僧一人あり
寺記云或時忽然ゝ二童子ゝ化ハ不可

高幡不動堂

長徳寺

本堂

庫裡

大師

不動堂

天弁

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

予是を作り住持諾す依て僧ハ一室ニ入り戸を閉て戸外ニ出ず
不日ニ造功畢ぬ竟ニ興僧ハ去て行方を尋ねと云く室の地ニ稲荷を勧請す
古鰐口一口 不動堂ニ懸る 径一尺九寸文字
九十四字を刻す 銘左の如し

敬白 奉懸
右尋當寺者慈覺大師建立清和天皇御願所第二建
立斗川陽成天皇 彼時頼義朝臣自於登山奉崇八幡第三建立永意得
行齊両檀 大檀那美作助真并記氏一宮田人鍋師源恒有
文永十年癸酉五月廿日 銀念西守氏 鐵青蓮

服石 不動堂の後愛宕祠の傍ニ有り巾六尺高サ五六尺忌明の時土人此石ニ請て
後諸の佛神ニ祭祀すと云り
二王門 左右ニ金剛窟 迹の像を置く
惣門 二王門の左ニ並ぶ 額 高幡山 僧浩然筆
鼻井 庫裡の前左の方の山の裾ニあり廣サ七尺斗の井泉を云 相傳建武二年乙亥八月
四日の夜大風発り堂忽ニ顛倒す故ニ平地ニ引下ると云り 諸人寒熱の二病腫物眼疾
等其餘諸病とも此ニ清泉涌出す後鼻井と称し阿伽とす 或ハ飲或ハ其痛所ニ塗りて平愈せり
鎌倉大草紙曰享徳四年正月廿一日武州府中分倍川原へ寄来る

成氏五百餘騎ゆく馳出短兵急ニとり卸し火出る程ニ攻戦ひくる
間上杉方の先手の大将右馬助入道憲顯深手負て引かるる
高旗寺ゆく自害ス鎌倉勢も勝軍ハ敗れと石堂一色以下百五
十人討死しく戦ひ敗れ分倍河原ニ陣を取云く 高旗寺とハ當寺
縁起曰平山武者所季重幼より當寺の不動尊を崇敬し世ニ強
勇の名を顕せり治承の頃平家追討の時も鎌倉の右大将家ニ
属し義経ニ隨ひく西國ニ趣き一の谷ニ勇を揮し武名世に
明らけし故ニ平後當山の頂ニ此堂を建立を然る建
武二年乙亥八月四日暴風の災ニ罹て殿堂破壞を依て後平
地ニ移せり其頃の財主ハ平助綱也大中臣女等ありとの
尓来天下風水或ハ疫癘等の諸災あるんと時ハ佛軒汗を生
しるのみ其威霊ハ枚挙ニ遑ス
木切澤 金剛寺より半町西の方の谷と云平季重堂建立
の時此所より堂材を伐出し云 田所なりと云 伝

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

番匠谷 同一町西へ入谷を云是も季重御堂建立の時番匠の住居の地なりとの事

別旅明神 金剛寺より三町ばかり東の方別旅邑よりいにしへ此地の産土神とす則金剛寺奉祀の宮社なり傳へ云金剛寺の本尊不動明王の脇士二童子を彫刻せし異僧その像を造り終るの後立去らんとす近里の道俗喜悦のあまり其跡ふ隨ひて此地まで来りて建立し別旅明神と称す地名も又別旅邑とよぶ

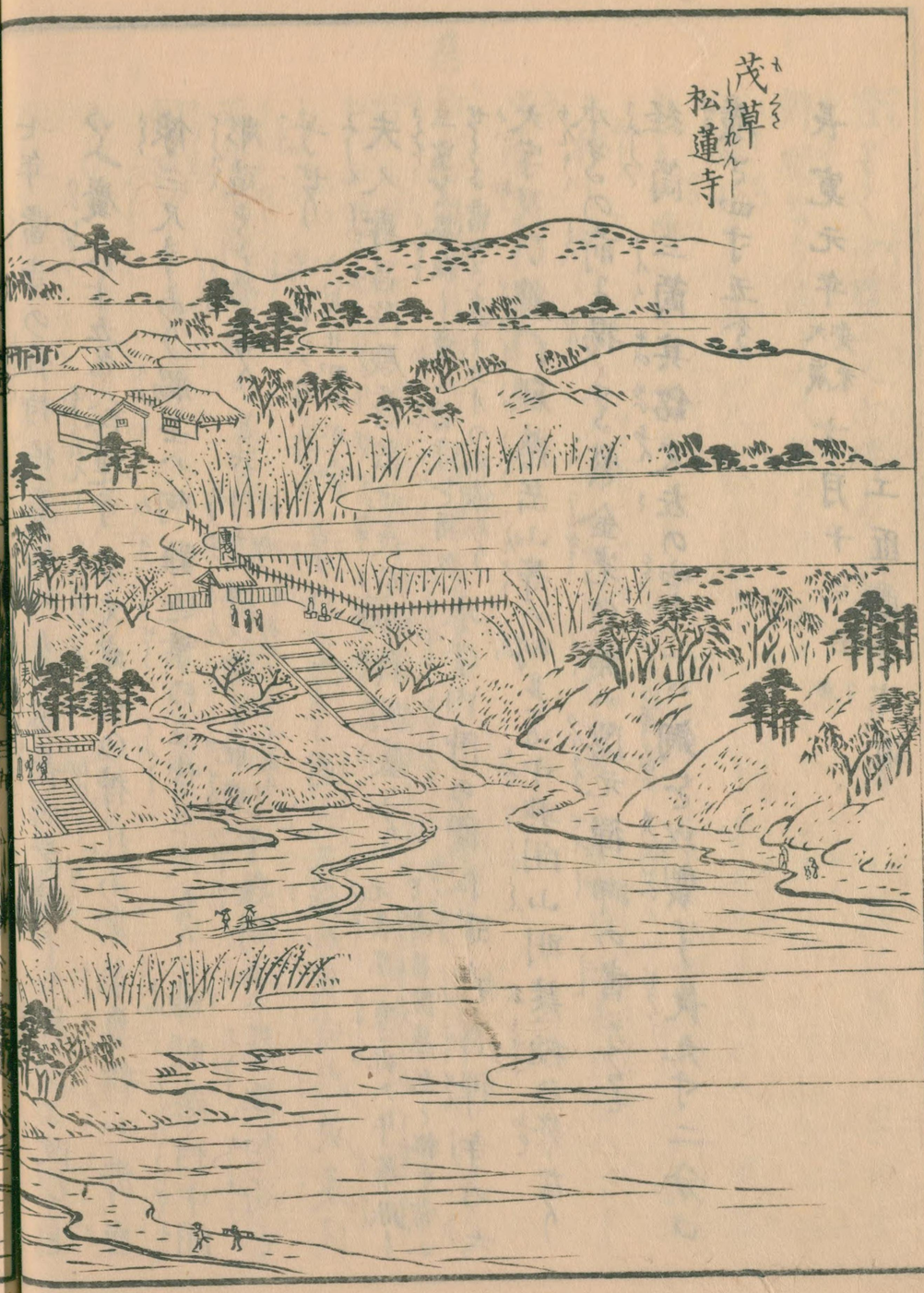
平惟盛之墓 金剛寺より一町ばかり西南平村（平山村ヨリ隣リ）農民又右衛門と云る人の構の中にあり青き一片の板石にて高サ七尺五寸巾二尺程厚サ二寸ばかり上の方よきりく字を彫下ふ文永八年辛未中冬日と云り土人相伝へて平惟盛の碑なりと云往古此地ふ平助綱と云武士住て平氏の遠裔なりしハ惟盛の菩提を弔ふ為ふ造るる年歴尤久�shi或ハ又助綱ふ墓なりとも云同し南の方二町ばかり山を

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

登るに中腹に又古碑あり剝落して讀へからず只平の一字のみ
鮮明なり高サ六尺餘巾二尺ばかり下ハ土中に埋む是餘古石塔
二基有りて高サ四尺ばかりなり土人平山季重或又平氏の人の墳墓
なると云傳へて分明なるなり此所ハ農民平氏某の家累世の堂域なり康正年号の碑ハもあり此地邑名を平
と称し殊に平氏の人多し里正平氏の家ハ小田原北条氏直の下し
文あるとなり

慈岳山松蓮壽昌禪寺　高幡より十二町斗東南の方百草邑にあり
昔ハ茂草なり作る八幡宮社地ハ源頼義義家兄弟奥州黄檗汎の禪林に
征伐凱陣の時山号升井を改て増威と云
江戸白銀の瑞聖寺ハ属せり昔ハ天台宗なり増井山と号し
天平年間道璿の高弟釋道廣大勧進し始て七堂全備の精舍を
創建す後康平五年伊豫守頼義奥州下向の時此地を過きり
ひ松蓮寺に投宿し八幡宮を再興あり朝敵追罰の御祈願
あり又建久年間頼朝卿以来源家累代の祈願所ハ定られ建長
七年當寺の住持祐慶相州より琳長師を請して禪院に改むと
慶長十五年松蓮寺方丈建営の棟札あり本尊釋迦佛座
像三尺斗あり脇士ハ阿難迦葉の立像三尺なり佛師藤村中圓
彫造せしの所なりと云中円ハ華人中比肥前長崎にありしとあり
号せり　享保六年辛丑八月廿四日炎滅　享保二年壬酉大久保加賀守忠英侯北
夫人壽昌院殿慈岳元長尼中興開基元長尼ハ享保六年薨深し
三宝を崇敬し竟に當寺を再興本堂内陣の額松蓮壽昌禪寺の六
せる當寺ハ四十五才の木像あり て壽昌院慈岳と称せ常ハ
大字及び總門額慈岳山等ハ何も中興開山明慧極和尚の筆なり
本堂の前に揚る紫金光の額ハ隠元禪師の書なり
経筒　三箇其銘文左の如し一ハ銅を以製す長九寸二分口
廣さ四寸五分

長寛元年大歳癸未十月十三日庚午
工匠藤原守道



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

元亨元年辛酉　大勧進聖人　僧辯豪
　　結縁者　僧玄久
　　如法書寫　僧觀賢
奉納妙法蓮華經　　僧定円
不可思議　　僧瑞久
　　僧定阿
　　僧尭尊
　　僧辯意
　　駈仕　僧樂西

同一箇　銅を以て製す長七寸五分口廣さ渡り四寸一分其文左の如し

大勧進　僧尭尊
大檀主藤原氏満貞刊
永萬元年九月十七日天

其蓋裏曰
大勧進所百草村
松連寺

同一箇　金銅を以製す長五寸口渡り三寸一分其文左の如し

美
鈞命　祈
日本幕下　一宮別當
建久四年　松連寺　修之
八月

八幡宮本地佛阿弥陀如来像　金銅一尺四寸あり土中出現の物に佛躰の脊ゑ鐫所の銘文あり左の如し

奉為皇帝　日本主君　當國府君　地頭名主　光三尺六寸
御願円満　安穏泰平　信心法主　子孫平安
悉地成就　師長父母　二親巨魂　助成合力
同共往生　乃至法界　平等利益
大歳庚戌　孟夏之天　七日壬子　建長二年
日本武州　多西吉冨　真慈悲寺　南閻浮提
願主佛子　慶祐敬白　施主源氏

敬白冶磨金銅影像法体弥陀座光三尺六寸
地頭名主
子孫平安
助成合力
建長二年
南閻浮提
施主源氏

敬白冶磨金銅影像法体弥陀座光三尺六寸地頭名主子孫平安助成合力建長二年南閻浮提施主源氏

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

とも莊園寄附なり仏具の備なく僧ハ鉢の貯を失ふ後ハ僧あり今日教上して當寺ハ一切経を安置し破壞を修理せしさの旨申請の間院主職ハ補せらるとあり又同書建久三年五月八日の条下に仏事を南所堂ハ於て修せ百僧出わり僧衆ハ真慈法皇四十九日の条下ハ小山田三郎茂成多悲寺ハ三口とあり又同書治承五年四月廿日の条下ハ宮連光寺等の地を自の所領ハ注し加へ林の頃廢せしも今ハ其田跡さへさ摩郡内吉冨并吉冨ハ此辺なりと地名されとも真慈悲寺ハ

八幡社記曰建久四年鎌倉右大將家法華経を書寫し金壺ハ入て當社ハ納る其書寫の所の竹紙法華経の文字多くハ朽敗し僅ハ残るのみ

升井

常ハ題を撤を尤清泉也

八國見

本堂の後の山の上ハあり此所ハ登れハ八箇國の

二王塚

松蓮寺より東南五丁ばかりを隔て山間の狹く小高き所ハ松樹十株繁茂せし地をさして称し此下を新堂と字する ハ古堂宇の存せし地なり又宝藏と唱る地も有り稲礎石 こゝハ今の経筒あり名とす又宝藏ハ自然銅一寸八分の観音の像を蔵ハ得たり

百草八幡宮

松蓮寺より西の方山の中腹ハあり則松蓮寺奉祀の宮なり八月十五日を以て祭辰とす本社向拜の額ハ八幡宮ハ三字ハ梅小路大納言定福卿の筆なり寺僧曰正殿ハ安置せる和の

神躰ハ八幡宮神宮王仁津戸明神武内大臣義家公等の木像なりと云相傳康平五年源頼義義家両公奥州の夷賊征伐の時山城國男山正八幡宮の社檀の土を穿ちて石瓶ハ盛来る一宇の社を造営して此地ハ勧請なり願書等を収めるる其後凶徒悉く平け凱奇の時再此地ハ至りて金銅の観世音の像を安置し永く祭祀を不朽ハ傳へんと(此観音のすハ松蓮寺の下ハ詳なり又此時五百石の祭田を寄附且両将軍の隨兵等も各軍功を祈を帯る処の刀杖を収め神徳を謝を尓来鎌倉頼朝卿當社の神を崇敬をあひ建久四年法華経を書寫しあひ金壺ハ入て奉納ありしとも星霜を経く件の宝器散失せしを正徳年間二王塚の地を穿て再ひ是を得たりとの寺僧云當社境内の樹木枯る後ハ悉く奥州の方へ向て倒る昔より今ハ至りて是當社ハ一奇異なりと云

一宮大明神社

一宮大明神社　百草八幡宮より十五六町北の方多摩川の南岸一宮村にあり　六所宮より八西南一里ばかりを隔つ　祠官新田氏大田氏両家より奉祀を祭神ハ天下春命なり　後瀬織津比咩及び稲倉魂大神を合祭し三神一社三扉とす　祭神今ハ小野神社ハ同し　舊事本記ハ饒速日命地神二代天忍穂耳尊の子ニ此葦原の中津國ハ降臨しまゝ時輔佐として隨駕しまゝる三十二神の其一神ゆゑに即三十二國ハ分降まゝ時信濃國ハ天表春命武蔵國ハ天下春命降臨なゝまゝ國を開きまゝ

社司相傳神代の昔當社下春命此地ハ止まり或ハ又國の祖の神ゆゑ後ハ國の神たりこれを祀るゆゑ狹今ハ倉稲魂命を配祀す　小野神社三神と称せハ命小野宮村小野神社へ遷座あり　社傳ハ一宮下春時世詳ならす然ハ成務天皇の時宇國造兄多毛比命武蔵國多麻の地ハ府を後一宮ハ開國の祖神小野宮ハ同郷の旧社なるゆゑハ國造崇敬あり倉稲魂命と共ハ合せ再び六所の宮の相殿ハ國社の祀を儲けられしとなり　又毎歳五月五日六所宮大祭の辰當社の祠官用中ハ至ると一宮小野三所の神輿を供奉しまゝ故ハ所ハ其の神幣を持し神輿帰社の祭又供奉して六所宮ハ至ると神ハ祭の後件の神幣を守護し直ハ一宮ハ帰ると當社の内殿ハ奉盛を供し祭奠をなすを旧礼と元り社なれハなりとゝ

按ふ當社一宮の旧史ふ所見なしとも既ふ地名を一宮と号祠をも一宮と称し武州國の祖神第一ふ鎮座なり一宮とハ称しかく一宮と称ふ東鑑治承五年四月二十日小山田三郎重成平太弘貞ら所領を自ら所領と注し加之と云条下ハ多磨郡の内吉富なるふ一宮蓮光寺なるの地名を載せ百草村松連寺所蔵の建久四年の経簡ゆゑ一宮別當松連寺と銘せり時ハ建久のむかし松連寺當社の別當なりしなり又高幡村金剛寺ふ存する不動の文永十八年の鰐口の銘ふも一宮田人銅師源経有

一本榎　一宮より南の方半町ばかりを隔て耕田の中ふあり樹の本に注連を繞らせり土人百草八幡宮の一鳥居の旧跡なりと云此所より百草の八幡宮へハ凡十町ばかり

横溝八郎墳墓　小山田旧関の地より一町あまり西南道より右の方の畑の中ふあり塚上松槻等の老樹繁茂せり太平記ふ正慶二年五月十日新田左中将義貞公武州分倍河原へ押寄せるふ四郎左近奏入道相模入道の舎弟慧性と号し大勢なりとも三浦ら一時の謀ふ破られて落行勢ハ散々ふ鎌倉をさして引退く討る者ハ數を不知大将左近入道も関戸辺ゆく已ふ討れぬと見えるを横溝八郎踏止りて近付敵二十三騎時の間ふ射落し主従三騎討死を安保入道道堪父子三人相隨ふ兵百餘人同枕ふ討死也其外譜代奉公の良後一言芳恩ふ軍勢共三百餘人引返し討死しける間ふ大将四郎左近入道八重身恙なく山内迫引れるとなり安保入道父子の墓も此辺近きあり今ハ

構の中ふ古墳あり上ふ榧の古樹茂れとも何人の墓の印なるや相澤氏の説ふ安保入道の墳墓なりとも今是非を考へ難し或人云此地熊野社邊関戸入口相澤氏の

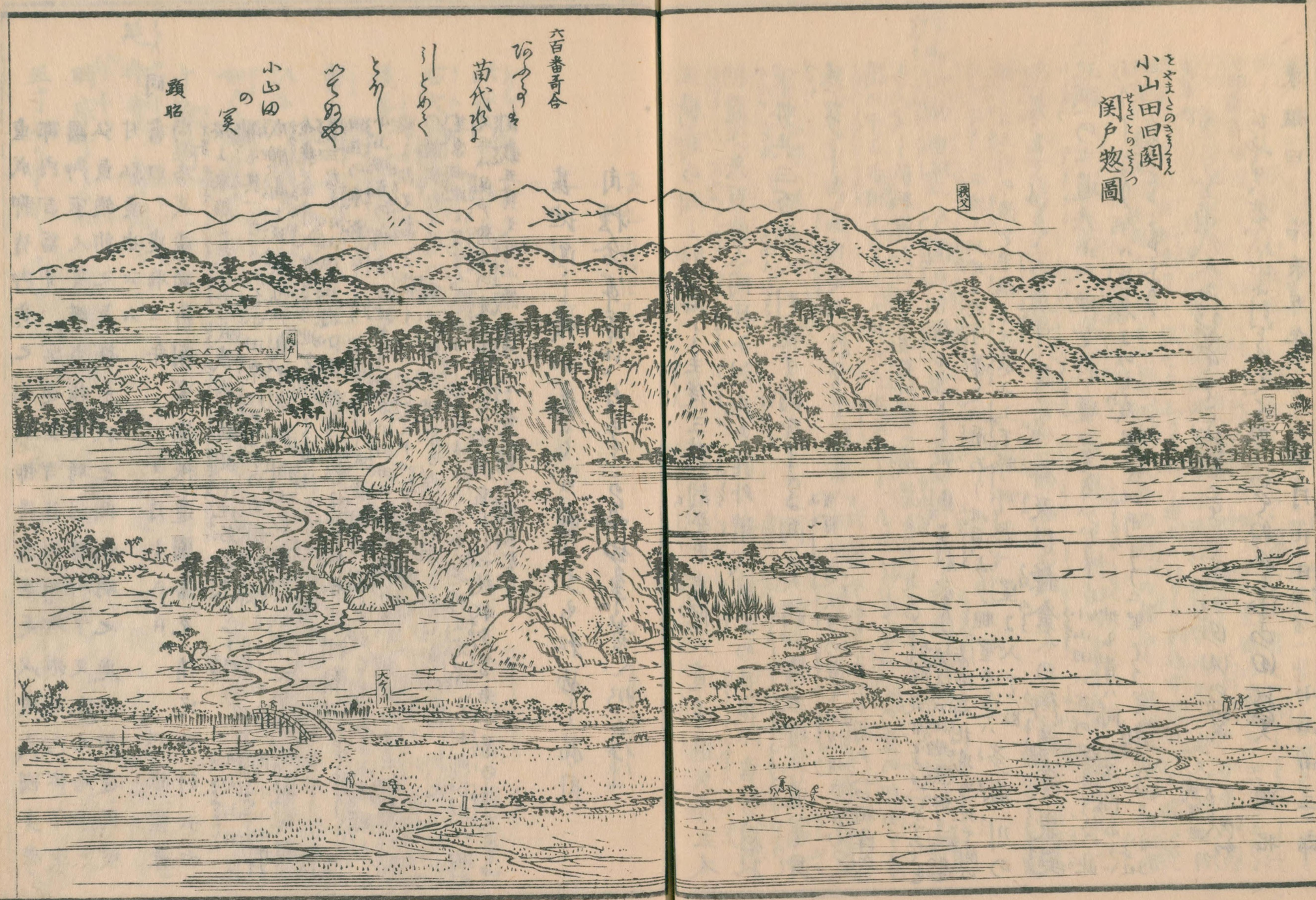
小山田開田址　今関戸と称せるとなり則これなり旧址なりと云按ふ此地ふ天守墨と云所あり左右高札場の地也関の此頂より眺望也ハ多麻川の眼下ふ玉川の流を平臨し又遥ふ上下野州を望ふ入

南岸ふそひて古府中より帝都及び鎌倉への街道あり東奥北越の二道共ふ此地を往還せるハなり小山田ハ荘の名なり此地も昔ハ同じ庄内なりし今ハ邑名ふのこる殘る此所より二里南の方ふ小山田村と称せるとなり

夫木抄　多摩川を萬代ふかけてそこもむこと小山田の苗

六百番奇合　多摩川ハ萬代ふかけてそこもむこと小山田の苗　顕昭

東鑑曰　治承五年　四月廿日　小山田三郎



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

重成聊背御意之間成怖畏籠居是以武蔵國多摩郡内吉冨并一宮蓮光寺等注加所領之内去年東國御家人安緒本領之時同賜御下文訖而為平太弘貞領所之旨捧申状之間糺明之處無相違仍被付弘貞也云云

同書曰　建暦三年十月十八日　以宗監孝尚為武蔵國新開實撿被遣圖書允清定奉行云云

按ニ東鑑ニ載スル所の武蔵國の新関所地名を主恐らくハ此小山田其一なるべし小田原ヒ条家の所領役帳に小山田庄ニて成瀬高坂森町田真光寺鶴間大谷廣瀬小川木曽山崎直谷黒川金森金井大倉等の地を領する由注せり又同書ニ松田左馬助布施善三郎小山田庄内小野地なるべしニ栗飯原四ケ村落合なるべし武蔵國の圖を以て考ふるに此関戸も田庄の廣嶋なるべしと雖武蔵の称関戸の里正相澤氏某の山田庄の咽喉の地なり故ニ小山田の称関戸宿屋免許盛秀判形家ニ古文書を蔵す一ハ天文二十四年関戸郷中河原の内正戒塚ニ有山源右衛門新宿立谷某の證文の證状なり二ハ関戸郷市の定日なり七年芝野ニ定置る由岡谷某の證文又ハ芝原田地なり三ハ関戸口の渡酒塩あい物役救免岩本某の證文又ハ関銭五貫文有山源右衛門の證文なり

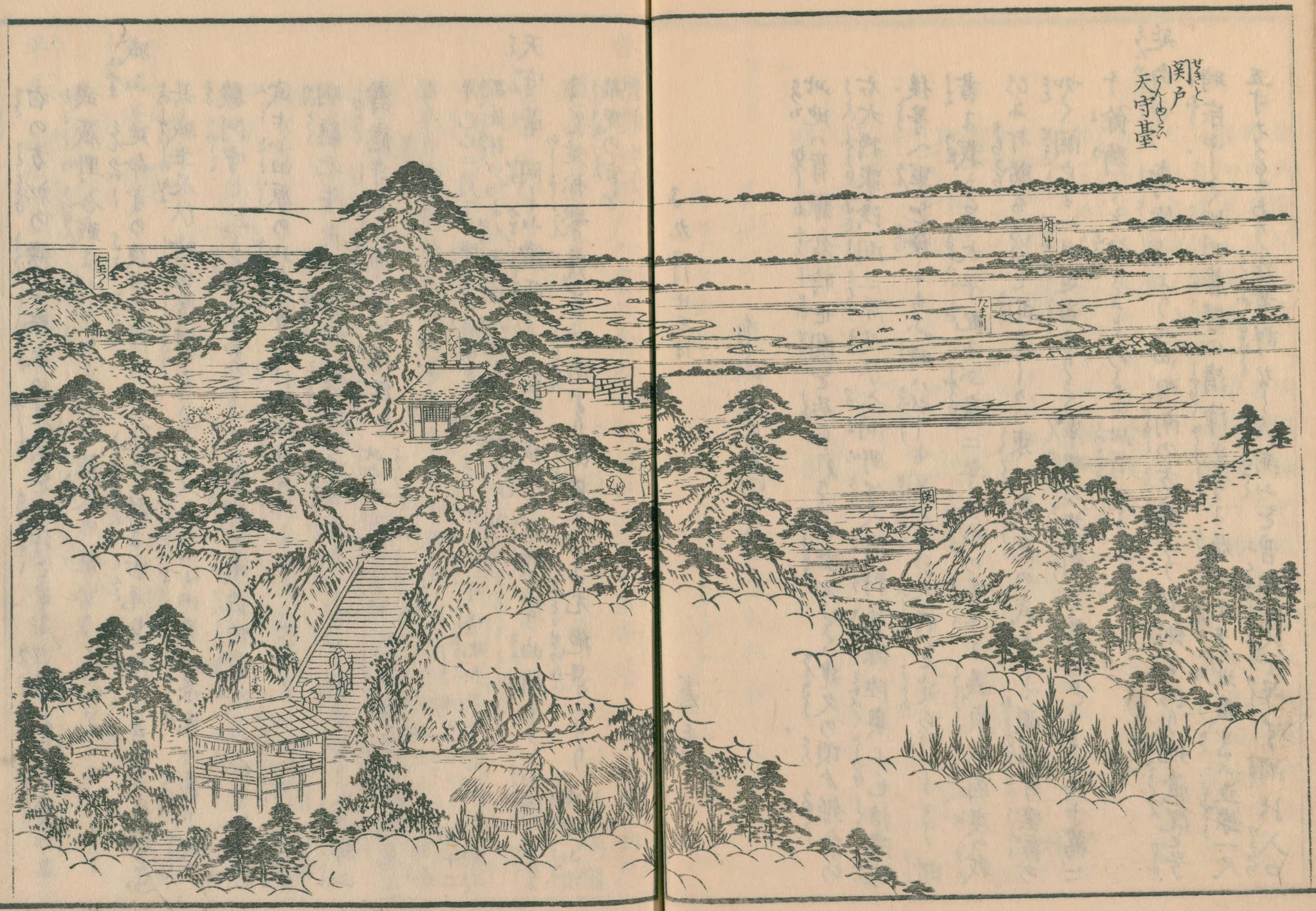
甚地関戸に限れるにこの重ねかも私如き筆者の仍件自撰合筆庶いに付るそこの如事者之仍件

多九月廿三日

有山源右衛門　憲秀　花押

此地ハ昔鎌倉時世関を居られる旧跡なり建久の頃か鎌倉の右大将家浅間三原及ひ入間野等へ御狩其餘陸奥上毛信濃越後等へ軍を發しかの時ハ必しも関戸口の大将を定られしかの諸書ニ載るも太平記ニ正慶二年合戦の条下ニ義貞数箇度の戦ひに打勝るひぬと聞えしかハ東八箇國の武士とも順付る雲霞の如く関戸ニ一日逗留あるく軍勢の著到を着らるるハ六十萬七千餘騎とそ注るとあるも此所のなり

延命寺　壽德寺より三四町南の方道より右側ニ地蔵院と号時宗ニて相州藤澤の清浄光寺ニ属せり本尊地蔵ハ立像一尺五寸ばかりあり作者詳ならず開山を普國上人と号す門ハ入口



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

右の方畑の傍に榛木の老樹を以印とする古塚あり正慶二年
武蔵野合戦に討死せし四百餘人の墓なりとぞ
城山　延命寺の後の山續をいふ土中稀に古瓦を得ることもあり
其城主及ひ時世等詳ならす土人云昔小田原北条家の幕下関戸
駿河守とかつるものこゝにありとも又ハ永禄の頃佐伯市助道永といふ
武士小田原の北条家に仕へ此地に住せるとぞいふ故に所を佐伯谷とも号けしと
明徳元年庚午念阿護法入道此地に一寺を創建ありて吉祥山
壽徳寺と云禪院を再興せ　此寺ハ関戸入口道より右側にあり　道永自ら中興開基と
なり日舜宗恵大和尚を請しゝ中興開山とす　市助法名を道永庵と称せ永禄十二年己巳二月三日陸奥ノ藏死せ道永の子孫三河守道也和泉守道安同集人
天守臺　同し山續西の方にあり城山の半腹より曲折して山頂に登る
まて老松繁茂す此所より四望せるに尤絶景なり　近頃山頂に金毘羅
権現の宮を営建せり

沓切坂　下関戸の宿の南の坂を云坂の上を古市場と唱へ昔商戸
驛舍等ありし地なりと天正已来此地の古道廃して今ハ名のみとな
りてもなれとも府中より横切て相州矢倉澤大磯等への官用の次
場なり　今も相州大山石尊富士詣杯　常州野州辺より此道ふもとより
合戰の時新田義貞公脇屋義治公絶て二百餘騎に討なされ御方の
勢も散々に行方知ラスなりしハ迚も討死せしき命るもハ鎌倉へ
打入て足利左馬頭基氏に逢て命を失ハんと夜半過る頃関戸を
過ぬるに石堂入道三浦介等の五六千騎の勢に出逢ひ神
奈川を経鎌倉へ打入勝利を得ること頃此坂より馬の沓をとり
たりしに依て名とすと云ふ
赤坂臺　関戸より十六七町東の方蓮光寺村を横きりて赤坂と号
く坂を登れハ赤坂臺なり一里半斗を経て河原谷と云地あり
平臺　赤坂臺の東の續をいふ此所に三圍ありまれる老松一株あり

土人甚兵衛松と字せ此地ハ矢の口ゟ属す

騰雲山明覚寺　矢の口村街道より南の横ゟ渡し場の南拾五町あまりゟ臨済派の禅林やゝく鎌倉建長寺ゟ属せ本尊釋迦如来ハ唐佛やゝく座像八寸ばかりなり当寺ハ往古足利義晴公建立なり佛刹やゝく其後廃寺となりしを慶長年間加藤太郎左衛門再興して菩提寺となせと云中興開基ハ揚雲和尚永禄四年ゟと号当寺に長坂血鎗九郎陣中守護の為鎧の中ゟ竜出りしとゝ伽羅の正観音を安置せり立像三寸ばかり弘法大師の作とゝ今ハ一尺斗の正観音を彫造して軸中ゟ秘安せり

小澤小太郎居宅旧地　当寺境内の辺を云今猶馬場の旧跡なりと称せる地あり又当寺の前ゟ小高き岡ありゝく蔵地下と号く平頃兵粮を収ゝる倉の跡なりと云小澤の城址の条下ゟも小澤某の名を云伝ふ小太郎と云ふも氏族の人なるべし

艸原山威光寺　同所明覚寺より道を隔て一丁斗向ゟ側二丁斗左へ入ゝあり新義真言宗やゝく坂濱高勝寺ゟ属せ本尊ハ大日如来座像三尺ばかり当寺ハ穴澤天神の別当なり

天明年間火災ゟ殿堂僧坊悉く焼亡せり旧記を亡せり

東鑑曰　治承四年庚子十一月十五日武蔵國威光寺者依為源家教代御祈禱所院主僧同相承之僧坊寺領如元被奉免之云云

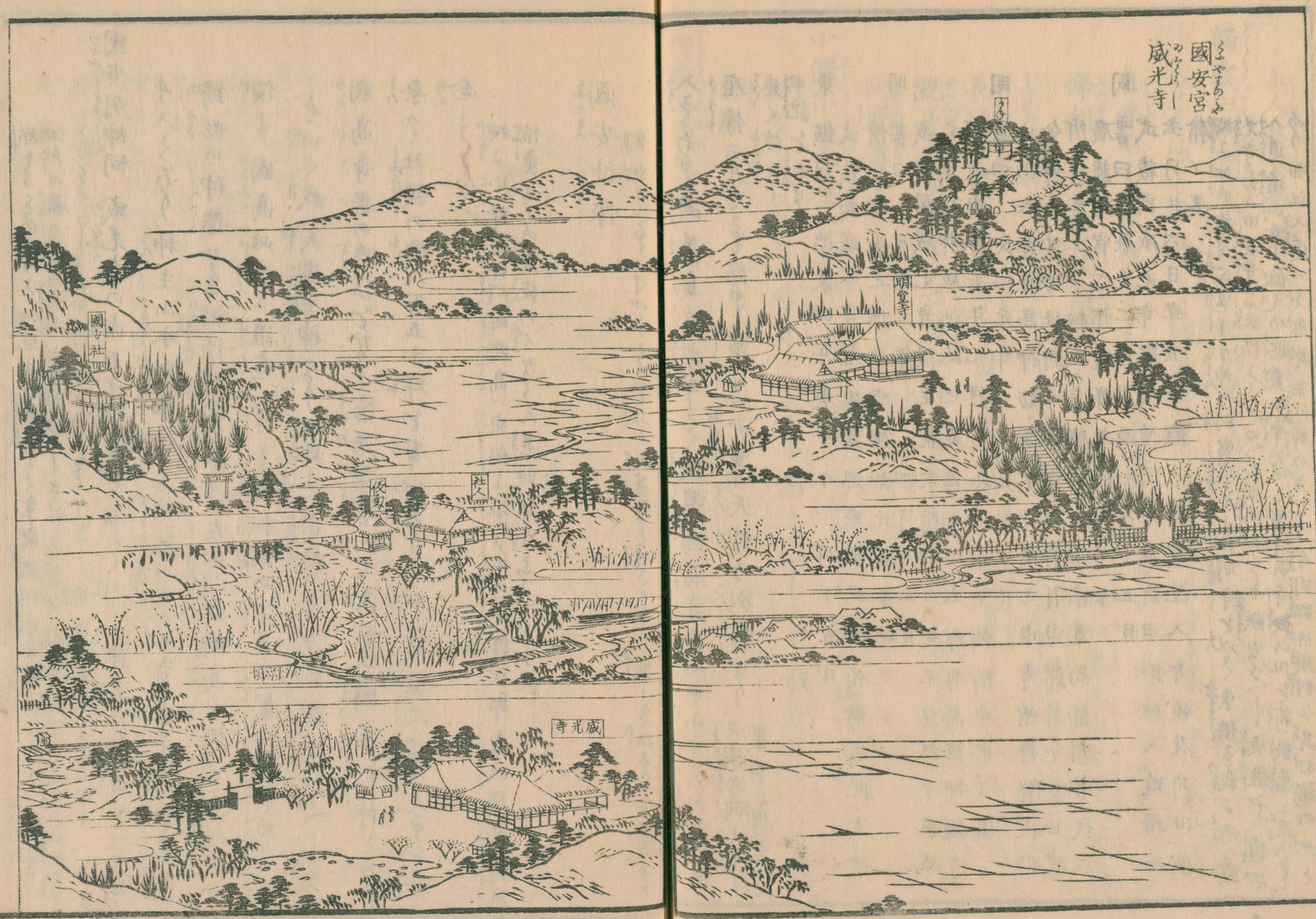
同書曰　元暦二年四月十三日武蔵國威光寺院主長栄懇祈日夜不怠然平家滅亡畢有御感沙汰之處為小山太郎有高被押領寺領之由捧去年九月所給御下文所訴申也下略

同書曰　文治元年九月五日小山太郎有高押妨威光寺領之由寺僧捧解状仍令停止其妨任例可経寺用若有由緒者令奏上政所可言上子細之旨被仰下惟宗孝尚摂判官代以下略

同書曰　建久元年戊辰七月十五日武蔵國威光寺主僧円海奏訴曰柏江入道増西廣藤判官代以下略

武蔵國威光寺領及苅田狼藉去月廿六日率五十餘人悪黨乱入寺領苅田狼藉下略

按ゟ江戸雑司谷鬼子母神の別当威光山法明寺を以く東鑑ゟ載る所の威光寺ゟ云由其寺ゟ云伝ふ誤なるべし東鑑ゟ柏江入道増西五十餘人の悪黨を率ゐ苅狼藉ゟ及ふ柏江入道ハ多摩郡柏江郷の主なり今同郡佐鄕村ゟ其旧館の地と



くにやすのや
國安宮
いかくこう
威光寺

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

称するものあり此地より程遠からず東江戸の雅司谷ハ其間七里隔つへしされとも當寺ハ天明年間の火災ふ旧記亡ひ猶多日訂正もくさのを
國安明神祠　威光寺の南五十歩斗を隔て同し側左の小道を三十歩
斗入るあり　神主山本氏奉祀す　神躰ハ左のめきものふして世ゟ云所の
鑄形の神像なり　相伝ふ往古小澤左衛門尉國高とゝる人此地を
領す　國高此地ゟ逍遥ありし頃松樹の下ゟ白髪の老翁現し不
して曰く我ハ大國主神なり此地ゟ崇祀らハ万民國安かるへしと云
國高奇異の思ひなすし宮居を営んてたちふ國安明神と崇め
祭る社領の地八百五十坪を寄附あり武運長久なるんすを祈
念すとゝ
按ゟ小澤左衛門尉國高ハ東鑑ゟ挙るの小澤次郎重政同左近将監
信重なるの氏族の人なるん其時世今ゟ
國安神像
銅物ゝ六寸四分ゝ上ふ天蓋なと付りしと覚しき跡あり下の方ゟ
花瓶のめきものあり
上の方ゟ口あり神躰を
僧形ゝ宝珠と
剣とを持しゝ
形なり

穴澤天神社　谷口邑威光寺より東北の方三町斗を隔て同し往還
右の方小道を入てあり社ハ山の中腹ゟあるを此辺を小澤ゝ原と唱今
祭神詳なるす後世菅神を合祭せり祭礼ハ七月廿五日なり又同日
神楽を修行し九月廿五日ゟ獅子舞を奥行を別當ハ真言宗はて
威光寺と号を
延喜式神名帳曰　武蔵國　多摩郡
穴澤天神社云

谷之口

穴澤天神社

此辺傍を小澤原と号く
社の後の山頂ハ小澤ヒ弟
重成の住ス城趾なり
文明の比し金子掃部助
此城より移り給ひ
吉里宮内左馬尉
ハ下横山より
来て生ひ城
を築き給ひ
すゆ
経金
大多
氏と

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

武蔵國風土記残編曰　武蔵國　多磨郡
穴澤天神　圭田三十六束三毛田　孝安天皇
四年壬辰三月所祭少名彦神也云云

當社の麓を澗水流れ多麻川に合て其流を隔て山岨に一の巖崖あり故に穴澤の名あり昔の巖洞は崩れたりとて今新に堀穿てる洞穴あり洞口は一ゆゑに内は二ツに分てあり内に種々の神佛の石像を造立す

小澤城址　谷口天神の山續浅間山の西に並へて東鑑に元久二年乙丑六月廿三日稲毛入道大河戸三郎に為に誅せらる子息小澤次郎重政は宇佐美與一是を誅せと又同書に同年十一月三日小澤左近將監信重綾小路三位師季卿息女を相伴ひて京都より參着を行光を以て支の由を尼御臺に啓せ下畧又同月四日夜に入綾小路の姫君尼御臺所の侍亭に參らせ御猶子とせ給ふ

武蔵國小澤郷　稲毛入道遺領　知行せらるへきの由仰られとあり鎌倉大草紙に文明九年長尾四郎左衛門尉景春山内上杉の家令職を兼らさるを憤て逆心を企頭定を亡さんとて武州相州の内一味同心れ兵を催し上杉家を襲ふとの聞る条下に金子掃部助は小澤と云城に拠て籠る間大田左衛門入道下知として扇谷より勢を遣し同三月十八日溝呂木の城を攻落せ同日に磯の要害を責られ一日防戦ひ夜に入れは越後五郎四郎かゝ城を渡し降參せ夫より小澤城へ押寄攻るとも城難所に落ること中畧景春一味の宝相寺なゝ吉里宮内左衛門尉以下小澤の城の後詰として横山より打出當國府中に陣を取中畧同年四月十八日金子掃部助に籠る小澤の城も責落せる

向の岡　今向岡と称する地は多麻川を北に帶て西は関戸より發て東は末長に終るとの是なり連岡の長凡六里あまりなり或は云今向の岡と称する連岡向の岡は狭武蔵國風土記残篇にて考へるに多磨郡北は向の岡に限るとあるを然に同郡秩山は南北東西五里尾山より八國山に至り東西二十里の連岡なり四方共に武蔵野に何れの方よりも岡に相對する故に向の岡と称する地は都筑に近とも普く是を呼ふ挙るのゝなるんと考へられ否は考へ難く佳

武蔵國風土記残編曰
多磨郡東限草窪岡西限金川南限華田浦北限向
岡云云

新勅撰　武義郡の内の國は[illegible]　小町
續古今　[illegible]　知家
玉葉　秋雲の[illegible]　後一条入道
同　[illegible]　定家
夫木　[illegible]　為家
家集　[illegible]　後鳥羽院
林名所考　[illegible]　隆源

都筑の岳　綴喜或稜　幾よ作る　小佛の嶺より小山田里迄八多磨郡に属せり平山或は横山なり既に古奇也と玉の横山と詠せる皆此間にあり又宮林の紫内山と云より神奈川迄の間八都筑郡に属せり南北に高底あり坂東路凡百里あまりなりと續くきの岳の名ありとも

青沼明神　同所長沼村八王子通道の傍にあり祭神大田命猿田彦大神二神なり勧請の初を考へしるべし社司福島氏奉祀を祭禮を八月十五日なり

按に当社八延喜式内青渭神社なるべし扨土人相傳に往古此地八大なる沼のありし地なりと和名類聚抄に武蔵國比企郡に渭後郡あり長沼の号ありと云されハ今も此辺地を堀穿つるに八土中悉く沼土なる時ハ当社を以延喜式内の青渭神社と云ハ地名を載く沼乃之利と訓も然る猶後人の考を俟のみ

太平記に正平七年閏二月小手差原合戦の条下に将軍の御陣へ馳参る人々中に長沼判官とあり此地より出る人歟

仙谷山壽福禪寺　谷の口の東の山續矢の口渡し場より十三町東南の方菅村にあり　此地八多磨郡後橋樹郡に属せり山辺を小澤郷ともいふ　推古天皇六年戊午聖德太子草創なしまふ佛刹なりしかの昔八天台宗にして建長寺の大安禪師の時より禪林とす今八曹洞派となりて越前の永平寺に属せ

本堂本尊十一面観世音　相伝に鳥佛師の彫刻或云和州長谷寺の像と同木同彫なりしかの大會堂と号く当寺十境の一なり

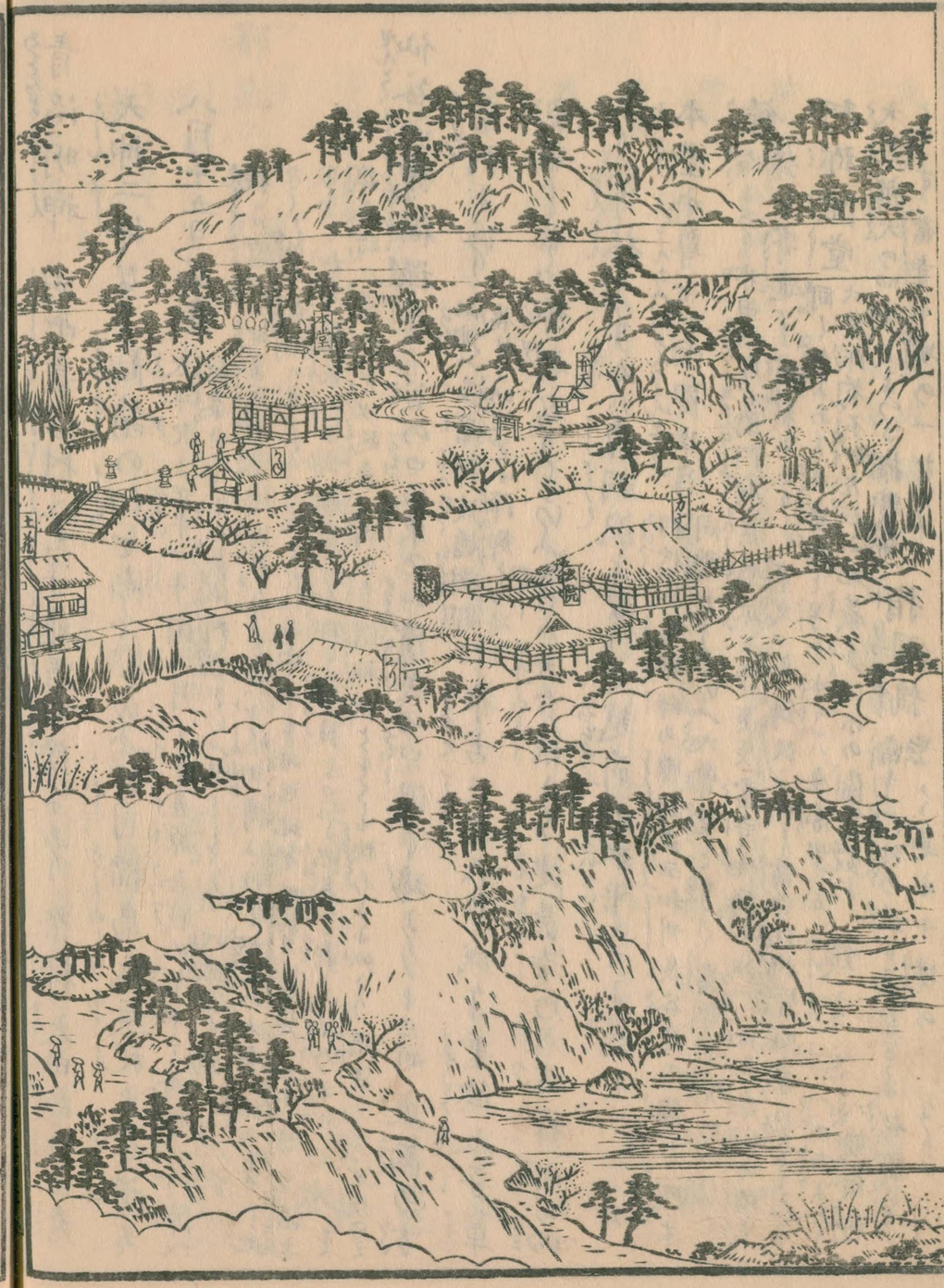
鐘　右に井田六郎右衛門尉某應永七年庚辰当寺住持の沙比丘宗円の項半鐘を寄進す破裂ふるひ寛文二年鋳改

阿弥陀堂　同し左にあり善應殿と号せ本尊八座像四尺五寸作者不詳左右に地蔵多門の像を安置

鎮守宮　の左にあり八幡稲荷大黒辯天の四座をまつる擁護廟と号す当寺十境の一なり

指月搞　当寺門外の流に架する夜搞を弱く是も十境の一なり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57　ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

養霞谷 同所の庫裡の後の谷を云道教の旧跡なり故に今採薬草秦徐福此地を守りしと仙谷と号く是も當寺十境の一
来り仙薬を採と云 攫霧松 同所関の左にあり今は枯て上俗道祖神松と云一根五
枝やく霧を攫うめきに成る名とす當寺十境の一なり
方丈 晩成室と云 十境の一なり
大般若経六百巻 梵函に収蔵す紙は黄色中古名猫高素の毫痕
其名を注せり相伝文治年間源義経と弁慶暫此地に憩ひ曹祖の例跡を追ひ當
寺観音の前に灰後の霊験を祈り特に大會堂に入て文治年間経巻の蠹損を修
繕写す永徳壬戌鎌倉左兵衛督氏満師の徳を慕ひ参詣の次再ひ此経巻の蠹損を修
補する由縁起に

夫仙谷山寿福寺者推古天皇六代戊午年聖徳皇
太子就于高橋妃之亡妣入阿弥尼公終焉之地剏
建七區練若以資冥福之舊趾也蓋山曰仙谷者
有仙人道鏡者栖遅于此山錬行修身積年矣故
亦曰道鏡谷也今古怪異之事甚多矣是仙人所為
也寺曰寿福者曾芟榛夷地之時得虚空蔵薩埵之
像因摽福一満之聖跡以税寺之遠大而安蔵今跡号
後建長曜侍者謄虚空蔵一経一軸而乞薩埵者推化師
之手墨録梓寄焉寺像上人自尔以来弱感滋衆矣或曰
和州長谷寺之像同木同雕也東平年中八幡太郎
義家欲排付奥州逆徒出陣之時路宿于太郎
祈開運於斯像後果獲遇感矣在昔小而
小澤

重政毎晨旋歩像前勉於晨香夕燈修現當之善因
矣梵函大般若経者名綱高素之毫痕也文治年中
源義経泊辨慶暫憩行於此地追曾祖之例跡祈恢
後之應験特復僖寫経之願而今尚現存矣雖然削
遭兵災寺既敗壊年久矣爰有前住建長大安禅師
大方慶和尚卓錫此地力與荒廃始振禅風僧俗雲集
山全公雅慕師之德揉而参詣之次再修補此経之
蠹損覃造営三間殿宇既而安十一面大悲像於大
會堂安弥陀善逝像於善應殿奉請辨財尊天大黒
尊天八幡大菩薩稲荷大明神於擁護廟繇是仰皇
圖之輩固祈佛運之紹隆而亹々不怠焉

應永十四丁亥稔六月十八日　　紀門宗圓敬記焉

相傳 推古天皇六年戊午聖徳皇太子高橋の妃の亡妣入阿弥尼公
終焉の地に就て七區の練若を剏建し以て冥福を資の舊跡なり
山を仙谷と号る仙人道鏡なる者此山に隠栖し練行修身事積く
年あり故に亦道鏡谷と号る 今古怪異の事甚多し是 寺を寿福と号
曾て芟榛夷地の時虚空蔵薩埵の像を得て因て福一満の聖跡を

水玉吐

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

標して以て寺の建大を祝せ（後建長曜待者虚空蔵経一軸を勝まるのみ石室善形禅師の手墨鋟梓して寺に寄す）
康平年間八幡太郎義家奥州征代出陣の時中路茲に宿せ其頃當
寺本尊に開運を祈る後果して感遇を獲て昔小澤小太郎重政毎
晨歩を像前に旋して現當の善因を修す然に兵災に遭て寺宇既に
敗壊せるの年久し爰に鎌倉建長寺の大安禅師大方慶和尚此地に
卓錫し荒廃を興し始て禅風を振ふ僧俗雲集せ（或云建長寺八十四世法慶
和尚是なり大方慶といふの誤なり）然に永徳二年壬戌鎌倉左兵衛督氏満師の徳操を
慕ひて参謁せるの次三個の殿宇を造営せられしとなり（三個とハ所謂大會堂善應
慶擁護廟是也）

展翼峰　壽福寺の左に續て聳る山を云俗に神明山とのみその形鳥の翼張
展いるが如し故に号とす相傳當社神明宮ハ昔小机より飛来こゝに
鎮座なしたりと云（壽福寺十境の一なり）
浅間山同し山續ひしく山頂に浅間の小祠あるに名とす土人ハ城の浅間山
と云是も壽福寺十境の一ゆゑに光照崖と号す荆棘を刈き小
篠を掃て登ること数十歩絶頂に至り崖に臨て眺望せれハ眼界
蒼茫として山水の美筆端に尽しがたし（浅間の祠あるより少し下りて小澤の城跡と称せる
地あり小澤の城の下に詳なり）

吐玉泉　壽福寺より後の方の谷を隔て西の山際農民の地にあり水源
白砂を吹出せるに号とす昔ハ小澤の白清水といへり是も壽福寺
十境の一なり

大谷山法泉寺　吉祥院と号せ壽福寺の南十町ばかりを隔て菅村の
内府中道の右にあり（稲毛頸中にて小澤郷に属す）天台宗にして深大寺村の深大寺に
属せり阿弥陀如来を本尊とす

薬師堂　寺より西の後一町半ばかりにあり毎歳八月十二日狮子舞あり弓を携へて
踊るあり又縁日八月九日も此日も賑ハへり
本尊薬師如来の像ハ慈覚大師彫造しなりと相傳左馬頭義朝の
御臺所常盤御前護持の霊像なり文治三年丁未八月叡山の文

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

顕阿闍梨此地の領主稲毛三郎重成と共に謀り當山を開き一宇の梵刹とし此靈像を安置せしむ後平政子御前崇敬あり其頃頼朝卿よりも香花の資料として當國高麗郡の地を寄附せらる建久八年丁巳頼朝卿當寺へ詣しあり又康元二年丙辰五月頼嗣公頼経公の菩提のため御堂再興なしあり大伽藍となりしも正慶建武の兵乱に廃壊せしより後旧貫に復せるなりとぞ鎧兜唐木小机等は二品ハ頼朝卿の寄附なりと云伝へ當寺の什宝とす

江戸名所圖會天璣之巻畢

江戸名所圖繪全部廿巻目次

壹之巻三冊　日本橋本町通神田小川町飯田町兩國靈巖島八町堀築地鐵炮洲芝口愛宕下西久保赤羽根三田魚籃白銀芝浦

二之巻三冊　品川驛大井鈴ヶ森池上矢口大森蒲田八幡六郷川崎鶴見生麥神奈川本牧程ヶ谷杉田金澤

三之巻四冊　外櫻田霞關永田馬場平川溜池麻布廣尾青山目黒碑文谷北澤世田ヶ谷澁谷四谷千駄ヶ谷代々木高井戸武藏野府中玉川向ノ岡

四之巻三冊　市谷牛込小石川大窪柏木成子堀之内中野小金井築土高田大塚雜司ヶ谷巣鴨板橋練馬大宮野火止

五之巻二冊　湯島上野日暮根津谷中三崎駒込王子川口豐島川

六之巻二冊　淺草下谷根岸山谷橋場千住西新井

七之巻三冊　深川本所龜戸押上柳島隅田川木下川松戸行徳國府臺八幡船橋

天保五年甲午孟春　未春

出版　須原屋茂兵衛

發行　須原屋伊八

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

839
20
57

三都發行書林

京都寺町通松原下ル　勝村治右衛門
大坂心齋橋筋唐物町　河内屋太助
大坂心齋橋筋安堂寺町　秋田屋太右衛門
江戸両國吉川町　山田佐助
江戸神田鍛冶町二丁目　北島順四郎
江戸淺草新寺町　和泉屋庄次郎
江戸芝神明前　岡田屋嘉七
江戸日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
江戸日本橋通二丁目　小林新兵衛
江戸日本橋通四丁目　須原屋佐助
江戸南傳馬町壹町目　須原屋文助
江戸神田通新石町　須原屋源助

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用